

北陸高速自動車道

埋蔵文化財発掘調査報告書

1974

新潟県教育委員会

北陸高速自動車道
埋蔵文化財発掘調査報告書

1974

新潟県教育委員会

序

本書は、県教育委員会が実施した北陸高速自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果をまとめたものである。

本調査は、見附地区に予定された高速道路用土取場内の大平城跡・双ヶ塚の二遺跡および工事用道路予定地内の内町遺跡の合計三遺跡について、埋蔵文化財緊急調査を実施した発掘記録である。

この調査により、平安時代の遺跡のあり方、中世山城における施設・規模についての一端をうかがい知ることができ、わけても中世山城については本県において発掘調査事例が少なく、今後の研究を進めるうえで一方向づけを示唆してくれたことは意義深かったと考えられる。本報告書がひろく斯界研究のための一助となればこれにすぎるよろこびはない。

終りに本調査に参加された調査員各位はもとより、多大のご協力・ご援助くださされた地元見附市及び同教育委員会関係者、また計画から調査実施に至るまで格別のご配慮を賜ねた日本道路公団・県高速道路課・県道路建設課の方々に対し、ここに深甚なる謝意を表する次第である。

昭和49年3月

新潟県教育委員会

教育長 矢野達夫

例　　言

1. 本報告書は北陸高速自動車道に伴う土取場・工事用道路で消滅する埋蔵文化財包蔵地のうち、昭和48年度に日本道路公団から新潟県が委嘱を受け、発掘調査を実施した3遺跡の発掘調査記録である。
2. 昭和48年度に発掘調査を実施したものは内町遺跡（見附市大字内町）、大平城跡・双ツ塚（見附市大字島切陸町）で、本報告書はこの順序で掲載した。
3. 遺物の整理・復元作業は県教育庁文化行政課埋蔵文化財担当の職員があった。
4. 遺物の実測、写真撮影及び図版などの作成は関 雅之・戸根与八郎（大平城跡・双ツ塚）、本間信昭・家田順一郎・駒形敏朗（内町遺跡）があたった。
5. 本報告書の執筆は発掘担当者を中心に、各調査員と討議検討の上、分担執筆したもので、文末に執筆者の氏名を明記した。
6. 煙滅した見付支城の踏査記録を伊藤正一氏に執筆して頂き、関連するものとして本書に掲載した。
7. 発掘調査にあたり、参加者各位及び見附市のあたたかいご支援とご協力を賜わった。また日本道路公団高速道路東京建設局、日本道路公団新潟工事事務所、県高速道路課、県道路建設課から種々のご配慮を賜わった。記して感謝の意を表したい。

目 次

内町遺跡調査報告

I 序 説	1
1. 発掘に至る経過	
2. 発掘調査の経過	
II 遺跡の地理的環境と歴史的環境	3
1. 地理的環境	
2. 歴史的環境	
III グリッドの設定と層序	6
1. グリッドの設定	
2. 層 序	
IV 遺 物	8
1. 土 器	
2. 砖 石	
3. 寛永通寶	
V ま と め	14
1. 出土遺物について	
2. 内町遺跡の意義	

目 次

大平城跡・牛ヶ沢双ツ塚調査報告

I 序 説	16
1. 遺跡発見の経緯	
2. 発掘調査の経過	
II 遺 跡	21
1. 遺跡の位置	
2. 周辺の遺跡	
3. 調査地点の選定	
III 遺 構	25
1. B地点の遺構	
2. C地点（牛ヶ沢双ツ塚）の遺構	
3. D地点の遺構	
IV 出 土 遺 物	35
1. 繩文土器	
2. 土師器	
3. 中世陶質土器	
V 総 括	39
1. 見付支城について	
2. 大平城跡（牛ヶ沢双ツ塚を含む）出土遺物	
3. 大平城の綱張り	
4. ま と め	

図版目次

内町遺跡

- 図版第1図 遺跡遠景・遺跡近景
図版第2図 発掘グリッド
図版第3図 C24グリッド断面・D66グリッド断面
図版第4図 遺物の出土状態（蓋）・遺物の出土状態（坏底部）
図版第5図 遺物の出土状態（土師器壘形土器）・D66グリット樹木出土状態
図版第6図 土師器、須恵器、中世陶器、近世・現代陶器、砥石

大平城跡

- 図版第7図 見付本城跡・大平城跡
図版第8図 北尾根より本丸をのぞむ・本丸より北尾根をのぞむ
図版第9図 第2号土塁の発掘スナップ・本丸東側の平坦部
図版第10図 第1号土塁のセクション・第1号空堀断面
図版第11図 第1号空堀1Tコーナー・第1号空堀1T断面
図版第12図 第1号空堀2T堀底部・第1号空堀2T断面
図版第13図 第1号空堀3T堀底部・第1号空堀3T断面
図版第14図 第1号空堀4T断面・第2号土塁の断面
図版第15図 第2号空堀路面の断面・第2号空堀の断面
図版第16図 第3号空堀の断面・第3号空堀東側のあがり
図版第17図 第3号空堀西側断面・第3号空堀西側のあがり
図版第18図 牛ヶ沢双ツ塚1号塚・牛ヶ沢双ツ塚の発掘
図版第19図 牛ヶ沢双ツ塚1号塚・第1号塚の断面
図版第20図 牛ヶ沢双ツ塚の発掘・D1号トレンチの発掘
図版第21図 D1号トレンチ出土の土師器・D1号とD2号トレンチ
図版第22図 出土遺物（縄文式土器・古式土師器）
図版第23図 出土遺物（古式土師器・須恵器・陶質土器・石皿）

挿図目次

内町遺跡

第1図	内町遺跡周辺の地形と遺跡分布	4
第2図	遺跡附近の地形図	5
第3図	地質柱状図	6
第4図	地層断面模式図	7
第5図	土師器・須恵器・中世陶器・近世陶器	10
第6図	須恵器叩目文拓影・中世揩鉢拓影	12
第7図	寛永通寶	13
第8図	砥石	13

大平城跡

第1図	大平城跡周辺の地形	20
第2図	見附周辺の遺跡分布（中世以後の遺跡）	22
第3図	大平城跡全測図	24
第4図	B地点東壁断面	折込み
第5図	第1号土塁・第1号空堀断面	折込み
第6図	第2号土塁・第2号空堀断面	折込み
第7図	第3号土塁・第3号空堀断面	折込み
第8図	B・C地点全測図	26
第9図	第1号空堀・2T断面	27
第10図	第1号空堀・3T断面	28
第11図	第1号空堀・5T断面	28
第12図	第1号空堀・6T断面	29
第13図	第3号空堀・西側断面	30
第14図	C地点（双ヶ塚）全測図	折込み
第15図	D地点・第1号トレンチ断面	折込み
第16図	D地点・第2号トレンチ断面	折込み
第17図	D地点・第3号トレンチ断面	折込み
第18図	D地点全測図	34
第19図	石錆	35
第20図	出土遺物	36
第21図	出土遺物	38
第22図	見付支城略測図	40
第23図	大平城の遺構配置図	43

内町遺跡調査報告

I 序 説

1. 発掘に至る経過

内町遺跡は見附市内町字郭公花・炭子田に所在する遺跡で、内町から戸代新田部落にかけて耕地整理・耕作の際、須恵器・土師器・陶質土器等が発見されていた。昭和37年全国遺跡地図作成のため埋蔵文化財包蔵地調査が行われ、中村孝三郎氏によって遺跡として確認され、全国遺跡地図 No534番、内町遺跡として登録された。^(註1)その後も中村氏・見附市教育委員会によって調査され、若干の須恵器片の採集が行われ、これらの遺物は見附市教育委員会に保管され、この調査をもとに新潟県遺跡目録に記載された。^(註2)昭和45年農業振興指定地域の埋蔵文化財包蔵地調査が行なわれ、金子拓男氏によって再確認がなされた。^(註3)昭和43年県道長岡・見附・三条線の建設計画が発表され、内町遺跡を通過することになった。また昭和46年北陸高速自動車道長岡～新潟間の法線が発表され、昭和48年この工事のため見附市智徳寺裏山の土砂の運搬道路として内町遺跡附近が使用されることになり、道路建設計画が早まったため県教育委員会では、昭和48年4月13日土取りの対象地となっている智徳寺裏山と内町遺跡の踏査を見附市助役大塚剛士氏・市教育委員会・日本道路公団新潟工事局の同行を得て行った。その結果道路法線内及びその周辺より須恵器、土師器、中世陶器が採集された。同年4月18日見附市教育委員会の同行を得て再踏査を行い、土師器片が表採され、発掘調査をすべく最終決定を行った。5月23日、見附市・日本道路公団・第一建設を交え、発掘調査区域の決定、作業員その他の最終打合せを行い、6月7日～6月20日までの14日間発掘調査を行った。

註 1 「全国遺跡地図(新潟県)」文化財保護委員会 昭和43年

2 「新潟県遺跡目録」新潟県文化財年報第6 新潟県教育委員会 昭和42年

3 「農業振興地域指定市町村遺跡目録」新潟県教育委員会 昭和46年

2. 発掘調査の経過

本遺跡発掘調査は昭和48年6月7日～6月20日の14日間にわたって新潟県教育委員会が行った。遺跡所在地は見附市内町字郭公花・炭子田で、水田となっている。6月7日、現地で準備を始め、見附市と調査打合せを行った。6月8・9日地形全体測量を600分の1で作成し、法線センター杭を基準にし、3×3mのグリッドを全面に組み、杭打ち、繩張り、写真撮影を完了した。6月11日、発掘調査を開始した。水田のため水路に近い部分には水があふれ、排水の必要があるために水のひいている水田中、B14・18・22・26、C16・20・28グリッドから発

掘を開始した。C20グリッドでは近世陶器が出土し、C28グリッドでは泥炭層が溝状にのびていることが確認された。遺物はC28～C37グリッド、D66～D71グリッドに集中しており、須恵器、土師器、中世陶器、近世陶器等が発見された。6月15日にはB26、C28に見られたと同じ泥炭層のある溝がD63グリッド附近にみられ、下部泥炭層中より樹木が発見された。この溝から青磁片、須恵器片が発見されている。遺構としてとらえられるものは全くないが、須恵器、土師器、中世陶磁器、近世・現代陶磁器等が発見され、耕地整理等で破壊されてはいたが、成果をあげることができた。またこの調査にあたって各方面からの御協力を得、無事調査が終了したことを感謝いたします。

なお本遺跡発掘調査組織は次のとおりである。

(本間信昭)

調査担当者	本間信昭	(県教育庁文化行政課主事・日本考古学協会員)
調査員	家田順一郎	(県教育庁文化行政課嘱託)
	駒形敏朗	(県教育庁文化行政課嘱託)
	中島栄一	(新潟市立工業高等学校教諭・日本考古学協会員)
調査補助員	大島順平	(見附市文化財調査審議委員)
	小林昌平	(見附市文化財調査審議委員)
	宮島桂一	(見附市文化財調査審議委員・県文化財保護指導員)
	源川敏郎	(見附市文化財調査審議委員)
	芝木虎雄	(見附市社会教育課課長)
	田伏善作	(見附市社会教育課課長補佐)
	江田謙	(見附市立図書館主事)
	井口増一	(見附市立図書館雇員)
作業員	柳橋町・本所・東町・松ノ木町・元町の有志	
協力員	見附市役所	
	見附市教育委員会	
	第一建設	
事務局	柴野達男	(県教育庁文化行政課管理係長)
	小野栄一	(県教育庁文化行政課主事)
	刈部啓子	(県教育庁文化行政課嘱託)

II 遺跡の地理的環境と歴史的環境

1. 地理的環境

内町遺跡は見附市街地の北・約1kmの水田地帯にある。第1図と図版第1図で見るように、東側には東山丘陵がせまり、西側に沖積平野がひらけている。東山丘陵から流出する中小河川は、いうまでもなく見附市周辺の地形の形成に一定の役割を果しているが、なかでも刈谷田川は、一名を九十九折川といわれるほど蛇行のはげしい川で、現在は見附市街の南側から北上して信濃川にそいでいる。見附市街地をはじめ、見附市の村落の大部分は、この川が形成した自然堤防の上に立地しているといえよう。「新潟県治水調査書」によれば、水源地守門岳から栄村福島で信濃川に合流するまでの延長は60kmであり、洪水到達時間は8時間である。このように水源地が近いために、沿岸一帯は長い間、極度の渴水と洪水に悩まされてきた。渴水にそなえて各所に用水堰が設けられたが、なかでも今町上流の大堰は明暦年間に創設されて今日に至っている。内町遺跡の立地は、見附市街地の所在する自然堤防の後背部にあたり新潟町・戸代・本所の自然堤防に前面をさえぎられた湿地帯と推定できる。昭和23年版の2万5千分の1地形図をみると、本所の東側に2ヶ所の小沼がみられる。また新潟町から片桐町を経て田野尻町に至る間には、刈谷田川旧河道とも考え得る地形がみられるが、内町遺跡の周辺では、これをたどることはできない。このあたりでは、むしろ元町の東より流出する小沢の影響が残されている。この沢は水源地附近に数ヶ所の溜池をもち、灌漑に利用されている。

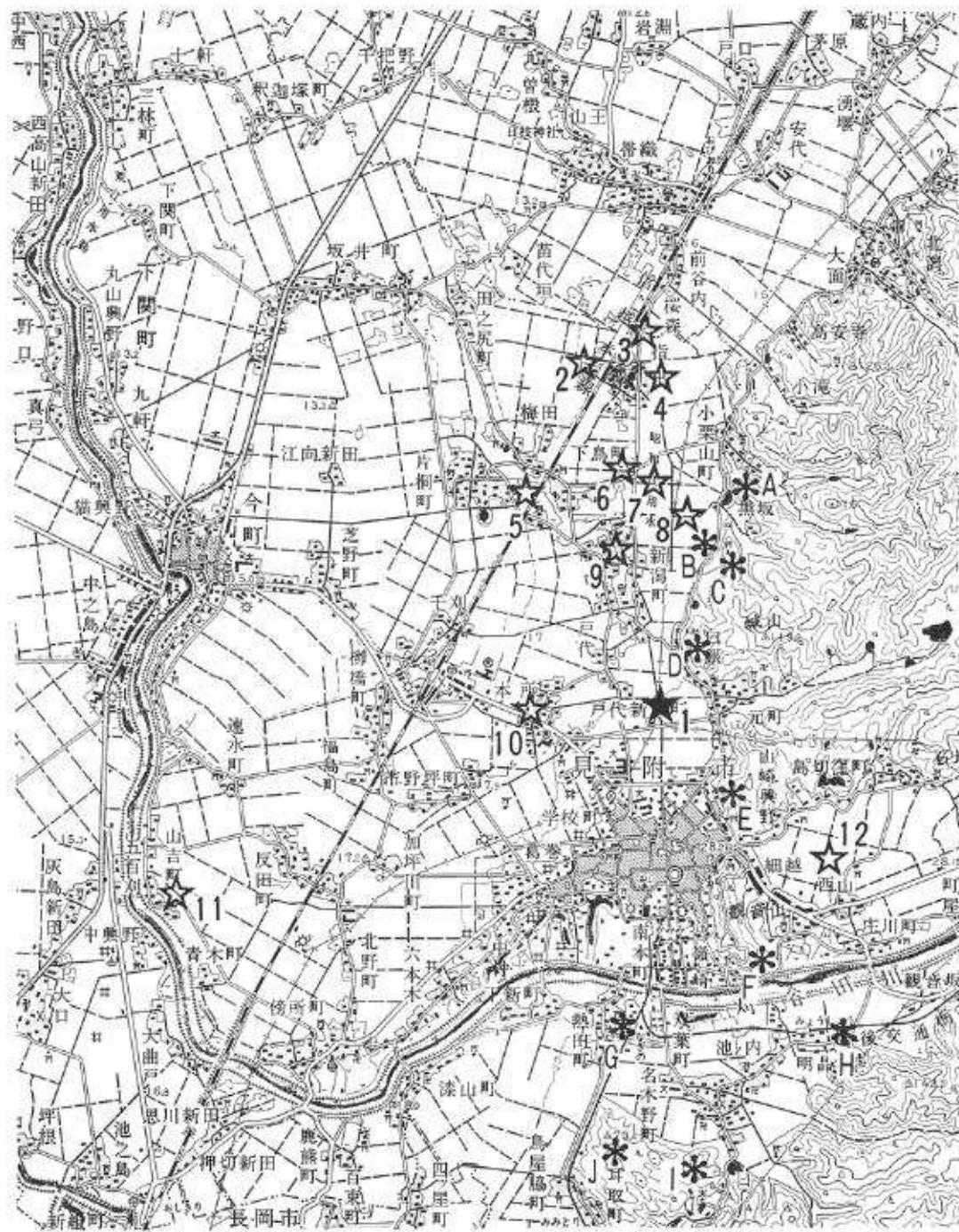
2. 歴史的環境

内町遺跡周辺の遺跡は第1図に示したように、縄文時代遺跡の大部分が東山丘陵先端部に立地し、土師器・須恵器の出土地は自然堤防とその周辺にみられる。縄文遺跡の大半は中期から後期に至る時期のものと推定されているが、遺跡別に示せば次のとおりである。黒坂(後期)、前山(中期)、羽黒(前・中・後期、弥生後期)、智徳院(中期)、三貴野(中・後期)、熱田(中期)、長者ヶ原(中期)、名木野(中期)、耳取(中・後・晚期)。また堤下遺跡は丘陵と沖積地の接点に位置し、数少ない弥生時代の遺跡として注目される。土師器・須恵器の出土地は新潟町北方の自然堤防と低湿地に多いが、山吉遺跡のように現在の刈谷田川河道に近いものもある。どの遺跡も発見された遺物量は少ないが、大半は平安時代頃に属する遺跡と考えられ、また指出町の前田と堂ノ前では古墳時代後期に属すると考えられる磚が出土している。

(家田順一郎・本間信昭)

註 1 「新潟県治水調査書」新潟県 大正6年

2 佐野貞助「刈谷田川大堰の沿革」刈谷田川大堰土地改良区 昭和28年



第1図 内町遺跡周辺の地形と遺跡分布 (1:5万 三条) ☆土師・須恵遺跡 *縄文・弥生遺跡

- 1. 内町 2. 桜森 3. 堂ノ前 4. 前田 5. 中才 6. 天が池 7. 天が橋 8. 野川
- 9. 埋田 10. 本所 11. 山吉 12. 庄川 A. 黒坂 B. 堤下 C. 前山 D. 羽黒(階子板)
- E. 智德院 F. 三貫野 G. 热田 H. 長者カ原 I. 名木野 J. 耳取

(地図出典：国土地理院「三条」1:50,000原図 昭和46年発行)



第2図 遺跡附近の地形図

III グリッドの設定と層序

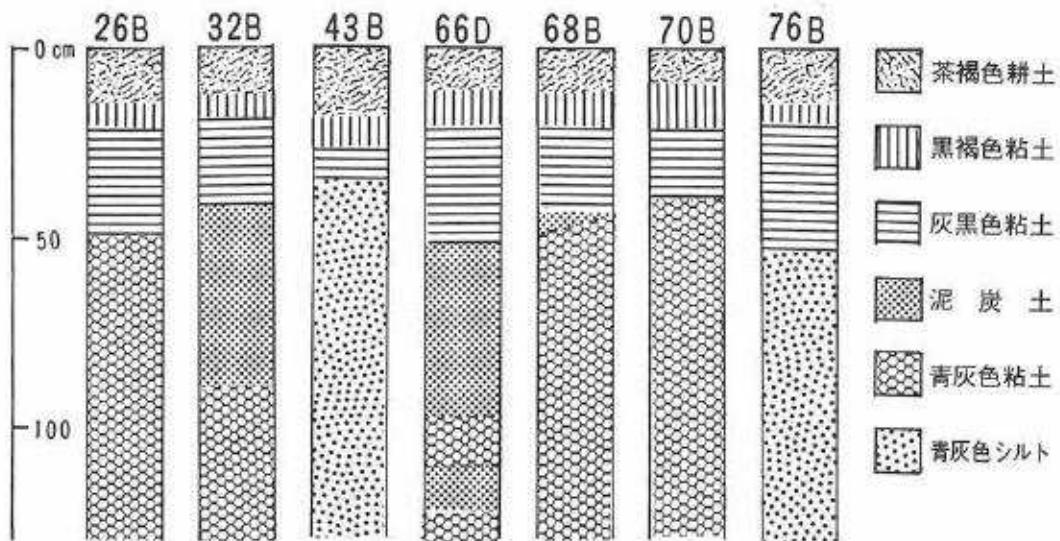
1. グリッドの設定 (第2図、図版第2図)

発掘調査の対象となった道路予定地は、14mの幅で南北に長く、北側でゆるやかに西へカーブしている。遺跡の範囲がかなり狭しも明確でなかったので、前後3回の現地踏査を行ない、その結果に従来の分布調査や遺物出土に関する情報を加えて検討し、発掘地点の中心を変電所と送電線鉄塔の間、南北約200mの間におくことにした。

グリッドは3×3mを一区画として、東西方向に5列、南北方向に77列を設定した。グリッドには東から西へアルファベット、南から北へ数字の記号をつけ、これをA1・B1のように組み合わせてグリッドの名称とした。図面上でのグリッドの総数は385であるが、第2図のように農道および農業用水路と各所で交差しており、また送電線鉄塔の北側では、すでに農業用水路のつけかえ工事が進められていたので、調査可能なグリッドの数は約半数に限られた。

2. 層序 (第3図・第4図、図版第3図)

第3図は発掘区域の地層の概観を南北方向の断面で示したものである。これに番号をつけて、上層から順に説明する。第1層は水田耕作土で15~20cmの厚さをもち、色調は概して茶褐色である。第2層は水田の心土といわれる土層で、おおむね黒褐色を呈する。ところにより灰褐色や赤褐色に近い色調も認められるが、これは客土・施肥・灌漑の状態など、いわば後天的な



第3図 地質柱状図

諸要素の影響によるものとみてよいと思われる。層の厚さは10cm内外である。第3層は灰黒色粘土層で、厚さは10~30cmである。遺物は主にこの層から出土している。以上の三層は全域に共通して認められたものであるが、第4層はグリッドによって、やや地質を異にするので、若干くわしく説明してみたい。

第4層のあり方は三種類に大別することができる。ひとつはB26以南とB70付近に認められる青灰色粘土層であり、図版第3図上が、その典型的な例である。この地層はB43・B76に代表される青灰色シルトないし砂層に漸移するが、その境界は不明確である。これらは、水田土壤としては、^(註1)グライ層とよばれる還元土壤に一括されるものである。もうひとつの地層のあり方は、B32とD66・B68のように、第3層と青灰色粘土層の間に泥炭層が介在するもので、アシ・マコモと推定される低湿地性植物の遺体を肉眼で見わけることができる。とくにD66(図版第3図下)では、泥炭層が青灰色粘土をはさんで二層になっており、下部泥炭層から、図版第5図下で見られるように、樹木が出土している。この層はB66・D64では認められなかつたので、きわめてせまい範囲に限られているものと考えられる。泥炭層からは須恵器杯・青磁各一片を検出したが、何れもD66の上部泥炭層から出土している。

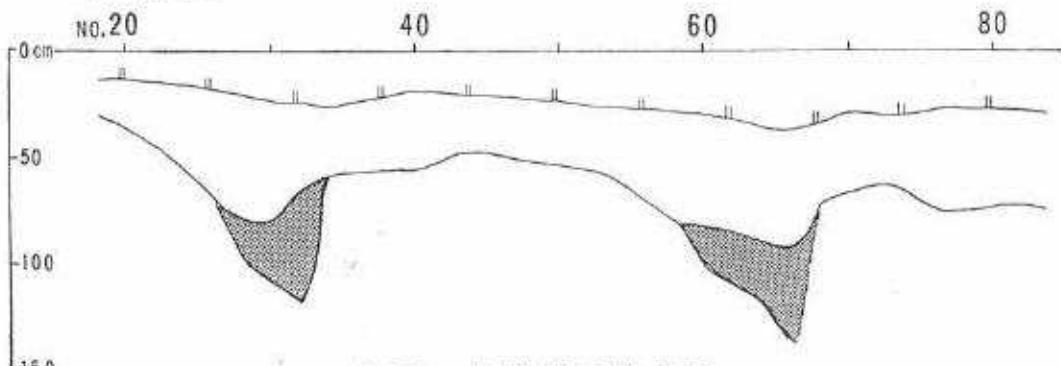
第4図は泥炭層のあり方を示すために、各グリッドの地層断面図を総合し、部分的に推定を加えて作成した模式図である。ほぼ南北方向の断面で、現地表面と第4層上面だけを示し、他は想像してある。南側の泥炭層はNo27~33グリッドの間にみられ、約21mの幅がある。北側のものはNo59~68グリッドの約27mの間に存在する。層の厚さは、どちらも最大の部分で50cmほどである。発掘区域の幅が15mに限られたために、東西方向のひろがりを確認することができなかったが、堆積の状況から小さな沼地と推定することが妥当であろう。植物遺体の堆積は一年に1mm程度にすぎないとされているから、本遺跡の沼地の存続は最大限500年と想定することもできる。遺物は、いわば沼地の北岸にあたる、No36・37・68の各グリッドで多く出土している。

(家田順一郎・木間信昭)

註 1 川瀬金次郎・横山 栄・松井 慎「日本の水田土壤」講談社 昭和47年

2 川瀬金次郎「新潟の泥炭土壤と地盤沈下問題」昭和35年

3 1に同じ



第4図 地層断面模式図

IV 遺物

1. 土器 (第5図、第6図、図版第6図)

本遺跡出土の土器は、土師器約70点、須恵器約40点、中世陶磁器、近世・現代陶磁器約30点であるが、大部分が細片化しており、器形が推定できるものは17点を数えるのみである。器形は土師器・須恵器の甕・壺・蓋・横瓶、中世・近世・現代陶磁器の皿・碗等である。図示した土器のうち第5図9~12・16・17、第6図11・15・17は現地踏査の際採集したもので、第5図6・15、第6図12は見附市教育委員会所蔵の採集資料である。

土師器 (第5図1~6、図版第6図1~5、8)

本遺跡出土の土師器は細片になっており、器形が推定できたものは甕形土器6点である。口縁部附近はロクロによる横なで整形がなされ、胎土は水漉し粘土に砂、砂礫が混入されている。焼成は悪く、器面内外面は荒れている。色調は褐色・淡褐色を呈する。

甕形土器 (第5図1~6) 1・2は口縁部が大きく外反し、先端部が厚く、角ぼっている。1は口径24cmで、口縁部から胴部にかけてほぼ直角に近い曲り方をし、胴部は頸部から垂直に下る長胴形を呈する。2は口径24cmで、頸部が「く」の字形に曲り、胴部がわずかに張る。いずれも口唇部が内傾した外削ぎになっている。3は口径21cmで、口縁部から胴部にかけて直角に近い曲りを呈し、口唇部が丸く、口縁部先端内側に凹がみられ、口唇部端が突きだしたようになっている。胴は1と同じ垂直に下る長胴形を呈する。4・5は口縁部が「く」の字形に曲るもので、4は口径22cm、口縁部がわずかに内彎し、口唇部が嘴状になっている。胴はわずかなふくらみをもって下る長胴形を呈する。5は口径21cmで、口唇部が嘴状に突き出し、胴部が張る。6は口径21cmで、頸部が「く」の字形に曲り、口縁部はロクロ整形時における凹凸が2段みられる。口縁部は内彎しつつ上り、口唇部でわずかに外反する。頸部はまるくくびれ、胴が張る。

須恵器 (第5図7~16、第6図1~16、図版第6図6・7・9~21)

須恵器は土師器と同じくほとんどが細片になっており、器形の一部、もしくは全体が推定できるものは、蓋3点、壺5点(13点中)、甕1点(約20点中)、横瓶1点である。胎土は精選した粘土に細砂を混入させており、器面はなめらかになっている。壺のうち平底を呈するものは焼成が悪く、淡褐色または灰褐色を呈するが、高台付きのものは暗灰色または青灰色で硬く、焼成は良い。

蓋形土器 (第5図7~9、図版第6図6・7・9) 蓋は4点出土しているが、1点は鉢の半欠部分で、鉢中央部が凹んでいる。7・8は肩部から下を欠いている。7は凝宝珠形の鉢をもつもので、鉢先端が丸くなっている。8は扁平な凝宝珠形を呈する鉢で、中央部先端が尖ってい

る。7・8とも鉢径は2.4cmで、あとから接合されている。9は鉢を欠くもので、鉢の接合部分の立ち上りがわずかに認められる。天井部は下っており、焼きゆがみによるものと考えられる。現存器高は1.5cmで、肩の張りはゆるい。肩から口縁部にかけては直線状に下がっている。口縁部は垂直に立ち、口唇部が丸くなっている。口径は16.5cmを計る。これらはいずれも天井部が厚く、口縁部におりるにつれて薄くなっている。色調は灰色を呈し、胎土には細砂が混っている。

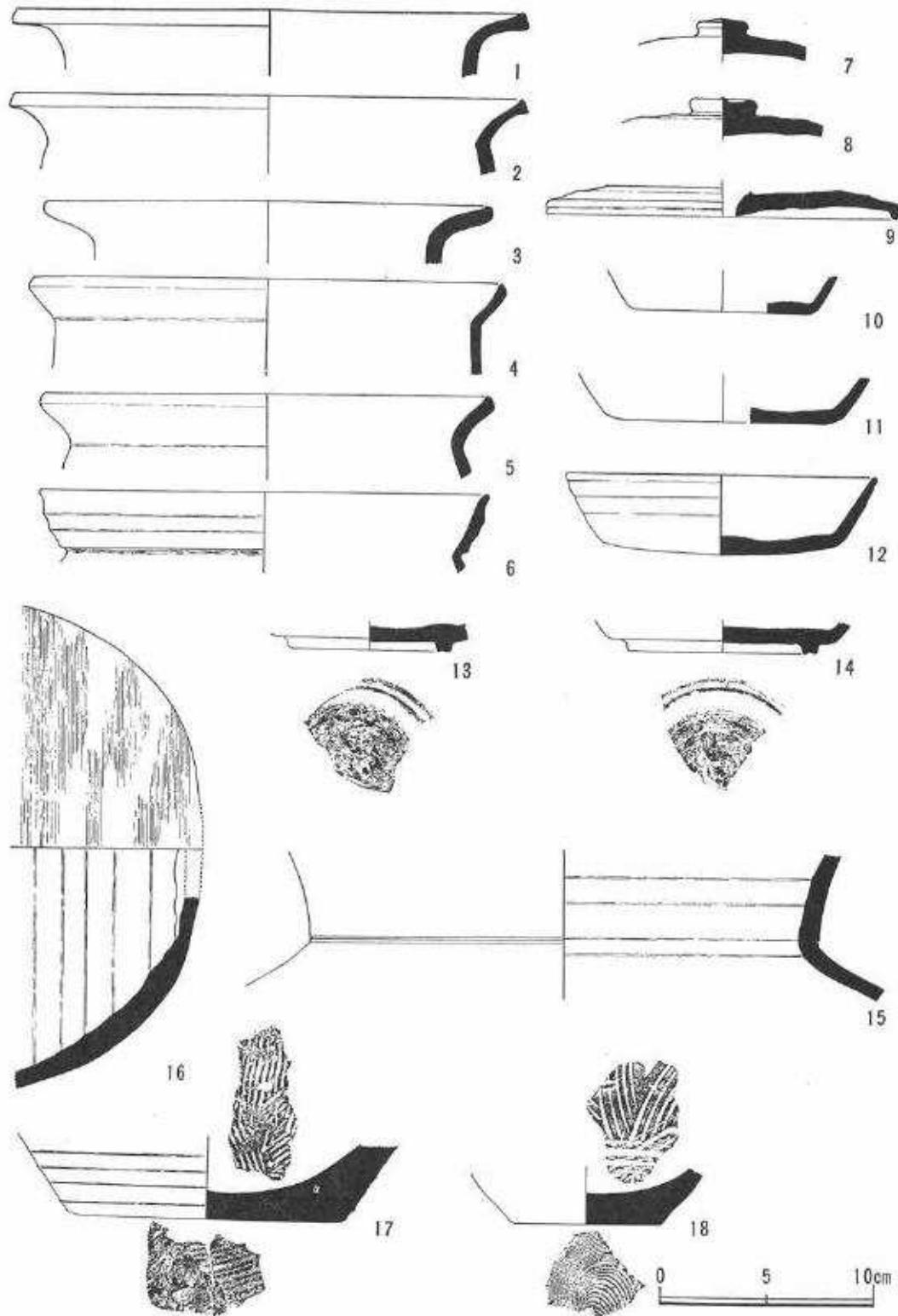
环形土器（第5図10～14、図版第6図10～14） 壺は13点出土し、口縁部6点、底部5点、口縁部から底部までつながっているものが2点ある。壺には平底をもつものと、高台のつくものがあり、いずれもロクロによる水漉き整形がなされている。底部はいずれも笠起しによって切離されている。胎土は精選されており、細砂を混入させている。

第1類（第5図10～12、図版第6図12～14） 平底の壺で、10は底径8cmを計る。底部からは約60°の角度をもって立ち上る。11は底径10cmを計り、底部から約60°の角度をもって立ち上る。いずれも底部中央が厚くなり、笠起し切離手法をとっている。色調は青灰色を呈する。12は口径15cm、底径11cm、器高3.7cmを計り、底部から約60°の角度をもって立ち上る。器肉は全体に厚く、ロクロによる凹凸が器面にみられる。底部は笠起し切離手法をとっているが、ゆるやかな丸みをもっている。色調は淡褐色を呈する。

第2類（第5図13・14、図版第6図10、11） 高台を持つ一群で、13は底径7.6cm、14は底径9cmを計る。いずれも底部のみで、全体についてはわからないが、深い壺となるものであろう。底部は笠起し切離手法をとり、高台は付高台で、ほぼ垂直に接合され、高台端に1条の凹線がみられる。色調は青灰色から灰黒色を呈する。

甕形土器（第5図15、第6図1～16、図版第6図15～20） 須恵器甕は約20点出土しているがそのほとんどが胴部破片である。胎土には砂粒が認められ、色調は灰色、青灰色、暗灰色を呈し、堅緻である。15は見附市教育委員会所蔵のもので、頸部は「く」の字形に曲り、胴部との境に1条の凹線と段がみられる。頸部は外傾し、肩部が張り、胴部が大きくふくらむもので、内面肩部より下に同心円印目文が施されている。焼成は堅緻で、暗灰色を呈する。胎土には砂粒がみられ、器面はやや荒れている。

第6図1～16は甕形土器胴部に施された印目文の拓影である。1～4は表面平行印目文に斜行の条のあるもので、内面には同心円印目文が施されている。5～8は表面平行印目文に条がみられないもので、5・6には櫛による条線がみられる。内面には同心円印目文が施されている。9・10はかすかに平行印目文の痕跡がみとめられる。11～15は表面格子状印目文を施し、11～13は内面に同心円印目文がついている。12は格子状印目文の上に同心円印目文を施し、14は同心円印目文の上に平行印目文がついている。15は内面に平行印目文がついている。16は表面無文で、内面には同心円印目文がみられる。同心円印目文には6・9にみられるような凸線が太く、彫の深いものと、1・10にみられるような凸線が細く、彫が浅いものの2種がみられ



第5図 土師器・須恵器・中世陶器・近世陶器

る。平行叩目文は1~4のように条のあるものと、6・7のように条のないもの、15の内面にみられる太いものと、6のように細いものがある。格子状叩目文には12・14のように格子目がほぼ正方形を呈するものと、11・13のように長方形になるものがある。外面の叩目文の種類が多いのに比して、内面における叩目文の種類が少なく、そのほとんどが同心円叩目文となっている。

横瓶（第5図16、図版第6図21） 横瓶の側面で、外面には整形の細い条がみられる。側面の孔径は8.6cmで、平たい粘土板を外面から張り、孔をふさいでいる。内面には指圧による凹凸がみられる。胎土は砂粒を含み、灰色を呈する。第6図6は壺形土器として扱ったが横瓶の破片とかも考えられる。

以上、土師器・須恵器について記述したが、遺物の出土状態が悪いのと出土量が少ないことからまとまったものとしては扱うことができなかつた。

中世陶磁器（第5図17、第6図17、図版第6図22）

本遺跡出土の中世陶磁器は、陶質土器底部2点、青磁片2点である。

擂鉢（第5図17、第6図17、図版第6図22） 本遺跡から2点の擂鉢底部が出土している。17は平底で、底径12.5cmを計る。底から約60°位の角度で立ち上り、器面には整形の浅い凹凸がみられる。擂目は縦と斜行に施されている。擂目幅は2.5cm中7条で、1本が約2mm幅であるが、わりと難に施されている。底部の切り離しは静止糸切り手法をとっている。第6図17は底部附近で、擂目は縦方向にきちっと鋭い工具で施され、2.5cm中9条を数える。胎土はいずれも酷似しており、珠洲焼に類するものと考えられる。

青磁は小破片であるが2点発見され、蓮弁鑄手のものである。色調は暗オリーブ色を呈し、胎土は淡灰白色であり、室町頃のものと推定される。

近世・現代陶磁器（第5図18、図版第6図23~30）

近世・現代陶磁器は約30点出土しており、すべてが日用雑器である茶碗・皿・鉢等である。これらは肥料等といっしょに混入されたものであろう。

擂鉢（第5図18、図版第6図23） この擂鉢は底径6.8cmを計る小形のもので、擂目は縦方向にゆるやかな弧を描いて施され、底部は横位と斜行が交叉している。擂目幅は1.5cm中5条で鋭い工具で施されている。底部は回転糸切り底である。

以上本遺跡出土土器について記述した。

2. 砥 石（第8図、図版第6図31・32）

本遺跡から2点の砥石が出土した。いずれも特別な出土状態は示さず、放棄されたものである。1は長さ7cm、幅5cm、厚さ2.3cmで、先端部が角形になっている。断面は真中がふくらみ、先端部が尖っており、かなり使用している。砥面としては両面と片面を使用している。2は長さ7.8cm、幅5cm、厚さ2cmで、先端の尖った方形を呈している。砥面は両面と両側面



第6図 須恵器卯目文拓影・中世擂鉢拓影

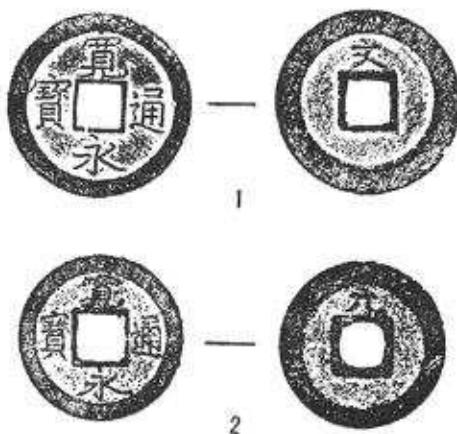
の4面が使用されており、特に側面は大分使用されており、弓状に凹んでいる。時期については不明であるが、稻刈用の鎌砥石と考えられる。石質は粘板岩質である。

3. 寛永通寶(第7図)

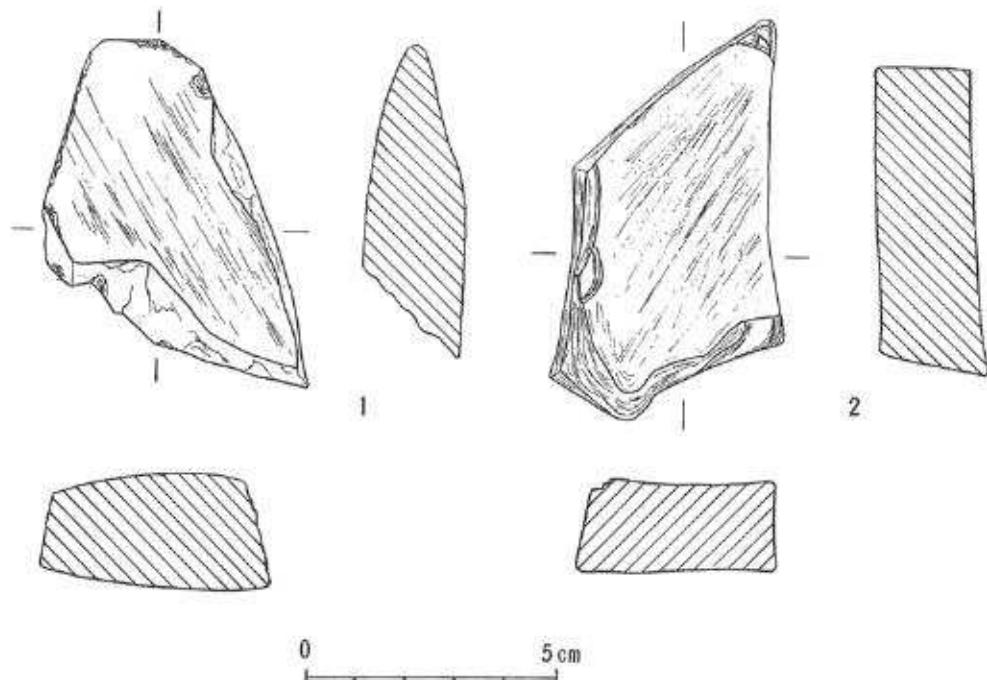
本遺跡から寛永通寶が二枚出土したが、いずれも特異な出土状態ではない。1は径2.4cm、外輪幅2mm、裏面に「文」の文字がある。これは文銭と称されるもので、寛文8年(1668)～天和3年(1683)に江戸亀井郷で鋳造されたものとされている。^(註)2は径2.1cm、外輪幅2mm、裏面に「元」の文字がある。これは元字錢と称されるもので、元文5年(1740)～寛保2年(1742)にかけて大阪高津新地で鋳造されたものとされている。

(本間信昭・駒形敏朗)

註 大桑田 淳『日本の貨幣』昭和37年



第7図 寛永通寶



第8図 砥石

V ま と め

1. 出土遺物について

本遺跡出土遺物は量的に少なく、出土状態も良好とはいえない状態で、層位的な把握を妨げている。しかし新潟県下の平野部における遺跡調査例の少ない今日、本遺跡出土遺物も一定の意義を有するものであろう。

遺物の中心となるものは土師器と須恵器である。土師器壺形土器は、長胴を呈するものと、胴が張る形のものと、2種の形態が認められるが、層位的には時代差の有無を把握することはできなかった。^(註1)新潟県下では、見附市に隣接する栗村半ノ木遺跡で、本遺跡と同様の2器形の壺形土器が出土している。^(註2)また近隣諸県においては、石川県三浦遺跡中層、^(註3)石川県矢田新遺跡、^(註4)富山県小森谷遺跡等において、同様の出土がみられていることが報告されている。

須恵器については、壺の形態、高台の形、底部の笠起し切離技法などは、長岡市間野窯跡、^(註5)^(註6)新津市七本松窯跡の出土のものに類似することが指摘できよう。また同様の点で、前述した半の木、三浦、矢田新の諸遺跡の出土遺物のなかに類似するものを見出すことができる。これらの遺跡は、いずれも8~10世紀頃に比定されているので、本遺跡の出土土器もこれらと同時期のものとしてとらえられよう。また1例だけ出土した横瓶は、県内の横瓶出土地18ヶ所に1地点を加えるものである。18ヶ所の内訳は窯跡8ヶ所、海中1ヶ所、骨蔵器としての出土1ヶ所で、集落跡と推定される遺跡は8ヶ所である。このうち窯跡出土のものは8~9世紀前半に比定されており、^(註7)集落跡出土のものは8世紀から10世紀後半にいたる時期に属するものと考えられている。

2. 内町遺跡の意義

すでに第Ⅱ章で述べたように、内町遺跡をはじめ見附市の平野部に立地する遺跡を考える場合、刈谷田川の氾濫とそれにともなう河道の変遷が重要な問題になる。第1図にみるように刈谷田川右岸には多くの自然堤防状の高地が形成されている。これらは、部分的には相互の関連を理解できるものもあるが、地形図上で総体的な把握を行なうことは困難である。このうち新潟町から片桐町・梅田の間には、村落の立地する微高地の間に帯状の水田が営まれていて、旧河道を想定するに難くない。しかし、その南方と北方では、一応の推定は可能であっても、流路を明確にたどることができない。南方では戸代・戸代新田の西側を農業用水路が南北にとおり、新潟町の南端で「旧河道」に入るものがみられるから、これが刈谷田川旧流路と何らかの関連をもつものとみることもできるが、たしかではない。

内町遺跡の発掘調査の結果からは遺構は検出できなかったので、発掘調査地点については遺

跡の中心部分ではないという想定

表1 内町遺跡周辺の土師器・須恵器出土地

が当然成り立つであろう。しかし前述したように、二ヶ所の沼地とみられる地層の北側に遺物の出土量が多いことから、この沼地が遺跡の成立に何らかの関連をもつことが考えられる。これに類似する遺跡の調査例には、黒崎町积迦堂遺跡があり、「遺物包含層と泥炭層とは、ほぼ平行して形成されたと考えられ……全体として、泥炭の状態のなかに、やや高く水の達しにくい部分に遺物包含層が発達^{〔註8〕}した。」という指摘がなされてい

遺跡名	地目	立地	時代	遺物
庄川	水田	低湿地	古墳	土師器
前田	蓮田	低湿地	古墳	縁2個
堂ノ前	畑地	自然堤防	古墳・平安	縁・須恵器
山吉	水田	低湿地	奈良	土師器
桜森	水田	低湿地	平安	須恵器
天ヶ池	水田	低湿地	平安	須恵器
埋田	水田	低湿地	平安	須恵器
中才	水田	低湿地	平安	須恵器
野川	水田	低湿地	平安	須恵器
天ヶ橋	水田	低湿地	平安	須恵器
本所	水田	低湿地	平安	土師器
内町	水田	低湿地	平安	土師器・須恵器

る。従って別表に示したように、内町遺跡および周辺の遺物出土地のほとんどは、現在の地形からは低湿地と認められるが、これらも内陸水面の上下する過程において乾燥化した一時期に包含層が形成されたものと考えることが可能である。しかし集落そのものが、これと同一地形のうえに成立していたか、あるいは現在の集落立地と軌を一にするものであったかについては、県下の低湿地における調査事例の増加をまたなければならないであろう。

(家田順一郎・本間信昭)

- 註 1 玉木哲・閔雅之・本間信昭「南蒲原郡栗村半ノ木遺跡調査報告」(『北陸高速自動車道埋蔵文化財調査報告書』)新潟県教育委員会 昭和48年
2 『加賀三浦遺跡の研究』石川県考古学研究会 昭和42年
3 『加賀矢田新遺跡の第1次調査』小松市立博物館研究紀要第6集 昭和46年
4 『小矢部市小森谷遺跡調査報告書』富山県教育委員会 昭和48年
5 中川成夫・小出義治「古志郡山木村間野窯跡発掘調査報告」越佐研究13集 昭和33年
6 中川成夫・倉田芳郎「新津田家七本松須恵器発掘調査報告」越佐研究11集 昭和31年
7 戸根与八郎「新潟県北蒲原郡加治川村下小中山の須恵器窯跡」越佐研究33集 昭和48年
8 閔雅之・稻葉明・林等・新田義信・木村広「西蒲原郡黒崎町积迦堂遺跡調査報告」(『北陸高速自動車道埋蔵文化財調査報告書』)新潟県教育委員会 昭和48年

大平城跡・双ツ塚遺跡調査報告

I 序 説

1. 遺跡発見の経緯

北陸高速自動車道の新潟—長岡間工事が一部着工され、新潟平野の穀倉地帯を縦貫する本高連道路は道路敷に盛土用の土砂を大量に必要とし、その土取対象地として見附市の智徳寺裏山が選定された。日本道路公団は県教育委員会に対して、この土取予定地及びダンプ専用道路法線内に所在する埋蔵文化財包蔵地の調査を依頼された。これを受けて県教育庁文化行政課では昭和37年作成の遺跡台帳から、ダンプ専用道路に内町遺跡の一部、土取予定地では牛ヶ沢双ツ塚が抵触することを確認し、雪消えをまって現地調査を実施することとした。

昭和48年4月12日、県文化行政課埋蔵文化財担当の本間信昭・家田順一郎・駒形敏朗の3名を現地に派遣し、遺跡の所在・位置・内容・範囲等の確認調査を実施した。この調査には見附市教育委員会・日本道路公団の関係者も同行された。

土取予定地内の牛ヶ沢双ツ塚については地元研究者にもよく知られているもので、昭和37年の遺跡分布調査で見附市を担当された長岡市立科学博物館・中村孝三郎氏により、牛ヶ沢双ツ塚として報告され「部落の北側、見附番城の南接縫中にあり、二基の円墳が所在する」と台帳に記されている。本遺跡の踏査により径約11m、高さ2mの円形マウンドを有する塚が2基東西に並んでいることが確認され、ボーリングの結果では内部主体などの存在はむずかしく、県内一般に見られる遺物を伴わない信仰塚の一種かと推定した。しかし、この牛ヶ沢双ツ塚の北側にブルトーザーにより開設された山道があり、その断面に幅1.5m、深さ70cm位の溝状の落ち込みが存在することを確認し、更にその北にも同様のものが存在するらしいことをつきとめた。

昭和48年4月18日、閔雅之・金子拓男・本間信昭は見附市教育委員会江田諒氏の同行を得、この溝状落ち込みが人為的なものであるか否か、その性格は何かと言うことを調査目的として、実地踏査を行なった。山一帯は松・杉と雜木の密生した状態で、全体を一つの視野でとらえることができなかったが、標高102mの山頂部は樹木抜根のため地表面は荒れていたが平坦であり、その北側尾根を2本の空堀で切断していることを確認し、山頂南側尾根の凹地に牛ヶ沢双ツ塚が所在している。

本踏査において、この一連の溝状落ち込みが空堀であり、南北尾根に山城が構築されていたとの確信を強めた。文献・伝承もないが新しく発見された遺跡として、協議の対象に組み入れることにした。

土取予定地はすでに以前から民間会社によって土砂採取が行われ、土取面は約40mの断崖となってしまっており、崖崩れの事故を起している。見附市は保安防災上から、公団が責任をもって土取をするよう要望されていた。

(閔 雅之)

2. 発掘調査の経過

新しく発見された山頂部の城跡を含む牛ヶ沢双ツ塚の措置について検討した結果、過去における民間会社の土取で40mの崖面が危険な状態を呈し、保安防災上の見地から土取はやむを得ないものと判断された。昭和48年9月、新潟県知事・亘四郎が受託者となり、日本道路公団と本遺跡の発掘調査委託契約を締結し、土取対象地の2遺跡について記録保存措置をとることとした。

発掘調査を主管する県教育庁文化行政課では埋蔵文化財担当の職員をたびたび現地に派遣し、調査地点・調査方法などについて検討をかさねた。また、密生する雜木と有用木の措置について、日本道路公団新潟工事事務所・見附市企画室・地主代表など関係者と現地話し合いをつめ、10月中旬以後、調査に着手することで了解を得ることができた。10月上旬から調査対象地の雜木伐採とその処理をはじめ、具体的な準備作業に入った。

本遺跡の発掘調査は新潟県教育委員会（教育長・矢野達夫）が発掘調査主体となり、県教育庁文化行政課埋蔵文化財担当の職員を中心に、県内考古学研究者及び見附市文化財関係者の参加を得て実施したものであり、また、作業員として地元部落有志の協力を受けて調査を開始した。

発掘調査は昭和48年10月17日に着手し、予定をはるかにオーバーして12月15日に終了した。当初の予定では1ヶ月程度の調査期間を考えていたが、農作業と冬への準備をひかえた時期のため予定の作業員確保ができず、密生する雜木の抜根に人手をとられて発掘作業は難行し、遅々として作業は進展しなかった。また、秋霖の影響を受けて土取崖面がゆるみ、2回にわたり土砂崩れを起し、調査地点への通路も2m以上のヘドロ状土砂に埋まってしまった。調査事務所も危険な状態となり、公団側から防災上の応急工事を進めてもらったが、小規模な土砂崩れが頻発し調査員通路の確保がやっとであった。

11月19日からみぞれが降りはじめ、調査後半の実測作業段階に入った12月7日には早朝から激しい雪となり、調査終了までの1週間は調査事務所の除雪作業、山頂までの通路確保、トレッチャ内の除雪など雪との戦いであった。調査員をはじめ作業員一同、積雪60cm以上の山頂で作業にあたり、事故もなく成功裏に調査が終了できたのは、各位の協力と努力に負うところ大であった。記して感謝の意を表したい。

調査日誌抄（発掘調査経過の概要）

昭和48年10月17日（水）～10月20日（土）

17日から発掘調査用具・器材の輸送及び調査事務所の設営作業を実施する。18日から現地で調査地点・調査方法等の最終打合わせを行ない、C地点（牛ヶ沢双ツ塚）を中心に平板・高低測量作業に入る。この作業と並行して、グリットの設定・杭打ち作業が20日までかかる。19日には文化行政課・伊藤正一課長補佐の参加を得て、調査上の留意点及び方法に関して助言指導を受け、近接する見付本城跡の踏査を行なう。

10月22日（月）～11月2日（金）

22日9時、調査事務所に調査員・補助員・作業員の全員が集合し、調査の概要・調査方法・庶務的事項の説明を行なう。その後、テント・発掘器材等を山頂までかつぎあげる。

山頂での設営準備終了後、C地点（牛ヶ沢双ツ塚）の発掘に着手する。1号及び2号塚を東西南北十字に分断し、封土の積み込み状況・内部主体の確認作業を行なう。いずれも内部主体等の遺構はなく、封土の積み込み状態が明確に把握された。C地点の黒色土層中から木炭片とともに土師器の破片が出土し、その出土状態は一定していない。1号塚の南北両端の墳丘裾部で幅約1mの周溝状の落ち込みが検出され、東側にめぐることが確認された。しかし、この封土が塚であるとする積極的な論拠はつかめなかった。封土の積み込み状態はB地点における土壘の構造と規を一にしていることが後にわかった。C地点の断面実測作業を行なう。

B地点では本丸部分に放置されていた樹根を整理・除去し、調査対象地の全体測量を実施する。本丸及び北側尾根を含むB地点にグリッドを設定し、Eラインの2m×98mの発掘作業を開始する。

11月5日（月）～11月17日（土）

B地点の本丸から北尾根にかけるEラインで3本の空堀が検出され、各空堀の南側には黄褐色粘土を積み込んだ土壘状の遺構が確認された。この土壘構築状況を検討した結果、C地点の牛ヶ沢双ツ塚も本丸南側における土壘であると考えるに至った。

本丸部分を西側に拡張して遺構の存否を追求したが、攪乱がはげしく遺構の検出はできなかつた。また、3本の空堀について、その走向を追求するためのトレンチを設定し、第1号空堀が本丸の東をめぐることが確認され、鋭い筆研状の空堀形態をとることがわかった。

11月19日（月）～12月1日（土）

前半の1週間は雨とみぞれのため山頂での発掘作業ができず、出土遺物の水洗い・注記作業を行ない天候の回復を待つ。

本丸東斜面下の広い平坦部をD地点とし、階段状を呈する削平地の配置が推定される地点である。この地点に1.5m×28mと1.5m×48mの2本のトレンチを南北に設定し、削平地の状況調査をした。上段の削平地では中世陶質土器片・土師器が検出されたが、中段以下では遺物がない。D地点の北側に1.5m×18mの3号トレンチを東西に設定し、東側の土壘状の小高い部分を切断した。

B地点では第1・3号空堀の走向を追求し、第1号空堀は牛ヶ沢双ツ塚の東をめぐり、第2号空堀は直線的に尾根を切断している。

12月3日（月）～12月15日（土）

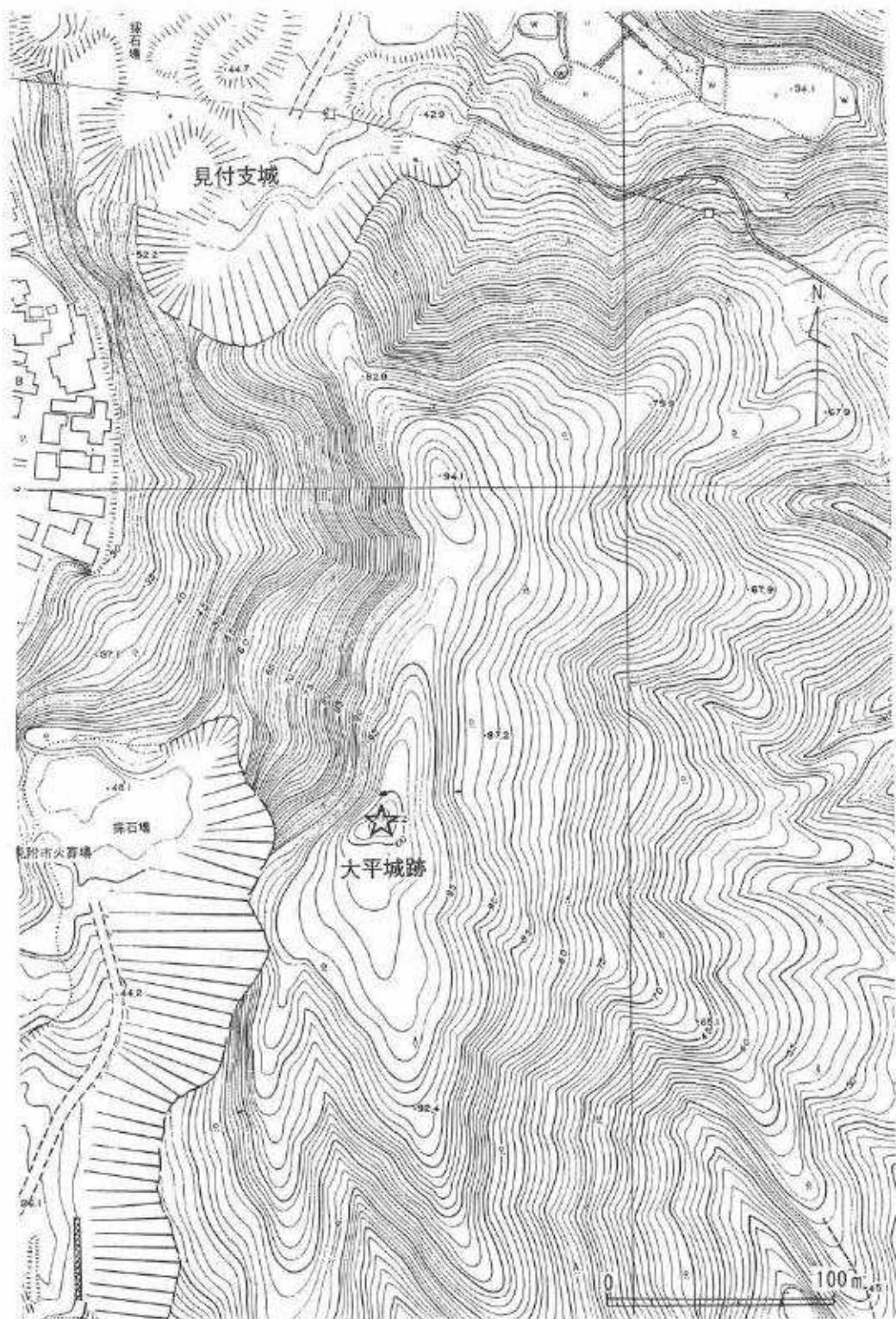
第3号空堀の走向を追求し、この空堀が第3号土壘をとりまくようにコの字形を呈し、北東隅で空堀が切れていることが確認された。また、各調査地点の補足的な発掘作業及び駆目押しを続けた。

検出された各遺構及びその断面実測作業・写真撮影を実施し、最後のまとめを行なう。この頃から連日の吹雪と積雪に悩まされ、除雪に追われながらの調査作業となつた。14日から調査器材の撤収・梱包作業をし、15日に全作業を無事終了することができた。

長期にわたる本発掘調査に対し、見附市当局並びに同市教育委員会関係者から種々のご援助と協力を賜わつた。ここに厚く感謝の意を表する次第である。また、県文化行政課・本間嘉晴課長をはじめ、課職員一同のあたたかい支援を受けたことを明記しておきたい。

なお、本遺跡の発掘調査団組織は次のとおりである（順不同・敬名略）。（関 雅之）

調査担当者	関 雅 之	（県教育厅文化行政課文化財主事・日本考古学協会員）
調査員	福岡 茂 彰	（県立美術博物館学芸員）
	戸根 与八郎	（県教育厅文化行政課嘱託）
	駒形 敏 朗	（県教育厅文化行政課嘱託）
	横山 勝 荘	（山北町立南中学校教諭）
調査補助員	宮島 桂 一	（見附市文化財調査審議委員・県文化財保護指導員）
	源川 敏 郎	（見附市文化財調査審議委員）
	江田 謙	（見附市立図書館主事）
	井口 増 一	（見附市立図書館雇員）
作業員	新潟町・本所・柳橋町・島切窪町の有志	
協力員	見附市役所	
	見附市教育委員会	
	板重建設 KK	
事務局	柴野 達 男	（県教育厅文化行政課管理係長）
	小野 栄 一	（県教育厅文化行政課管理係主事）
	刈啓 部 予	（県教育厅文化行政課嘱託）



第1図 大平城跡周辺の地形（日本道路公団提供）

II 遺 跡

1. 遺 跡 の 位 置

城跡及び牛ヶ沢双ツ塚は見附市街地の東、智徳寺裏手の山頂部に位置し、中心の地籍は見附市大字島切窪町に属する。この城跡は新しい発見であり文献・伝承もなく、標高102mの本丸と推定される地点の小字名をとって「^{おほだい}大平城跡」と仮称することとする。

本地域は背後に越後山脈をひかえる魚沼丘陵の西端にあたり、守門山系に源を発する刈谷田川が蛇行しながら西に流れ、観音山以西では時代によって流路を大きく変え、平野部の各所に河跡湖を残していた時期がある。本遺跡は観音山の北、第2図16に示した位置にあり、東側に南北方向の断層線が走り、この地盤状山地の尾根に遺跡が立地している。

図版第7図下は大平城跡の立地する山地を、西側水田部から撮影したもので土取の崖面が痛々しい。山頂の本丸部に立つと、西方眼下に見附市街と刈谷田川・信濃川の流れる低地帯を一望にのぞみ、遠く弥彦・角田山及び与板の丘陵地帯が視野に入る。南は米山、東は刈谷田川上流の柄尾方面が鳥瞰できる。本丸の北側、谷を隔てた前面に見付本城（図版第7図上）が位置している。この周囲の展望にめぐまれた地点に、城としての施設が構築されている。（関 雅之）

2. 周 辺 の 遺 跡

第2図は本地域に所在する中世以後の遺跡で、総数32の遺跡を示した。見附市から栄村にかけては遺跡の分布調査がおくれ、また、水田開発などで埋没したものも多く、確認がむずかしい地域である。

中世以後と考えられる遺跡はその内容によって4種に大別される。即ち、古錢出土地・塚・寺院跡・城館跡で、多くは具体的な調査がなく時代が定かでない。古錢を出土した瑞祥橋では工事中に淳化元宝・皇宋通宝・天聖元宝などが甕に入った状態で発見され、本所遺跡では宋錢を主体に約25,000枚の中国貨幣が出土している。ほぼ中世後半の時期に属するものであろう。

塚は小栗山経塚を除くとその性格・時代が不明で、牛ヶ沢双ツ塚・田井双ツ塚・片桐の三ツ塚・明晶の四ツ塚と言うように数量的名称を付したものが多い。形態は小円墳状をなすものが一般的であるが、田井双ツ塚のみ方形土壇状をしている。小栗山経塚からは珠洲系の斐形土器・片口形土器、銅製仏像・青白磁合子・蝶鳥山吹文鏡・経巻軸・直刀片などが発見され、出土品は県指定文化財となっている。寺院跡については個々の伝承はあるが、その内容は不明な点が多い。

本地域には城館跡が多く分布し、19遺跡をあげた。しかし、調査が不十分な地点もあり、坂井町に宇館の腹・馬場野があり、石地町には腰巻、町屋には桶ノ入などの小字があり、館跡の



第2図 見附周辺の遺跡分布(中世以後の遺跡)

- 1.三ヶ塚
- 2.片桐寺院跡
- 3.観念仏塚
- 4.片桐館跡
- 5.新潟寺院跡
- 6.新潟館跡
- 7.本所古錢出土地
- 8.大面城跡
- 9.小栗山経塚
- 10.小栗山寺院跡
- 11.小栗山城跡
- 12.見付本城跡
- 13.元町館跡
- 14.見付支城
- 15.見付支城
- 16.大平城跡・牛ヶ沢双ヶ塚(発掘地点)
- 17.鶴音山砦跡
- 18.梨木城跡
- 19.堀井城跡
- 20.瑞祥橋古鉄出土地
- 21.耳取塚
- 22.田井双ヶ塚
- 23.田井城跡
- 24.椿沢寺院跡
- 25.椿沢城跡
- 26.血の峰城跡
- 27.浦瀬城跡
- 28.長者屋敷館跡
- 29.四ヶ塚
- 30.太田寺院跡
- 31.神保城跡
- 32.柄尾城跡

(地図出典：国土地理院発行 昭和46年「三条」 昭和48年「長岡」 1:50,000原図)

存在が推定される。今後、徹底した小字名の調査と現場踏査を進めることにより、更に城館跡の存在を明らかにことができよう。

さて、19遺跡の城館跡の中で最も代表的なものに柄尾城がある。標高227m、山頂を削平して本丸とし、野面積みの鉢巻状石垣をめぐらしている。二の丸・三の丸・松の丸・空堀・堅堀等の施設がめぐり、戦国期の堅固な山城である。三条長尾氏の麾下の属城であり、天文12年(1543年)から長尾景虎がここにおり、本庄室乃を城代とした。31の神保城は柄尾城の出城と考えられている。

8の大面城は別名小滝城とも称せられ、11の小栗山城は大面城の左翼に位置する出城であると考えられている。12は見附市の城山に所在する見付本城で、本丸を中心に小曲輪を配し、空堀及び敵形阻塞の施設を有している。13は元町に所在する館跡で見付本城に伴うものである。14・15は見付本城の支城と考えられているもので、15は土取によって煙滅したが、敵形阻塞の施設を有するもので見付本城と酷似した構築手法をもっている。

16は本調査地点の大平城跡で、東方1.1kmに見付本城、東南8.3kmの位置に柄尾城がある。また、北11.4kmに三条城、東11.5kmに与板城、南12.1kmに栖吉城が位置している。17は観音山の北、諏訪神社裏手にある砦跡と推定されるもので、削平された階段状の遺構が10数段認められる。

(関 雅之)

3. 調査地点の選定

第3図は南北にのびる尾根を中心に、調査の対象地点を示したものである。尾根の主軸は北北東に向き、西斜面は急な崖状を呈しているが、東斜面は西側に比して緩やかであり、標高90m前後の位置に平坦なテラスを有する。この平坦地は標高93mから88mの間に3段の階段状平坦部を南北に配している。主軸となる南北尾根線をみると、山頂部が標高102mで最も高く台形をした平坦地であり、この北は幅の狭い尾根となって緩やかに北へ傾斜し、2本の空堀が地表上から確認されている。山頂から北200mの位置で急傾斜の崖となり、1段低い北先端部に第22図の砦跡が存在した(土取により煙滅)。山頂の南側は緩やかな沢となり、牛ヶ沢双ツ塚が東西に並んでいる。第1図は航空写真測量図(昭和47年作製)で、地形全体の様相が把握できる。

調査地点の選定は密生する雑木の伐採抜根と関連するので、人為的な造作が施されていると推定される個所に調査の焦点をしほった。第3図に示した山頂の本丸とその北尾根のトレント設定部分をB地点とし、更にその北の小高い標高95mの一帯をA地点とした。本丸の南側は牛ヶ沢双ツ塚のあるところで、ここをC地点とし、東斜面下の平坦地をD地点とした。発掘作業はA地点を除く、B・C・Dの3地点を調査対象に選定し、遺構の検出と城の縦張り確認を目的として発掘調査を実施した。

(関 雅之)



第3図 大平城跡全測図

III 遺構

1. B 地点の遺構

智徳寺裏山、標高102mの山頂部とその北側尾根をB地点とし、この地点における地表観察の概要を記すこととする。第3図に示した如く山頂部は標高102mで、平坦な削平地を思わせる形状である。この平坦地は南北24m、東西は北側で12m、南側で約20mの台形を呈し、面積は400m²弱の広さを有している。この部分が城の本丸にあたり、主郭部と考えられる。本丸の西斜面は約35°～40°の急傾斜をなし、標高99m以下は土取によって断崖となっている。東斜面は西側に比してやや緩やかであり、約25°～30°の傾斜角度をなし、標高93mのあたりから平坦地が階段状に形成されている(D地点)。本丸の東斜面、標高100mの位置に幅約2～3mの平坦地が通路状をなして南に走っていることが確認され、発掘前には城に伴う帶曲輪状の通路で、武者走り的な施設ではないかと推定した。

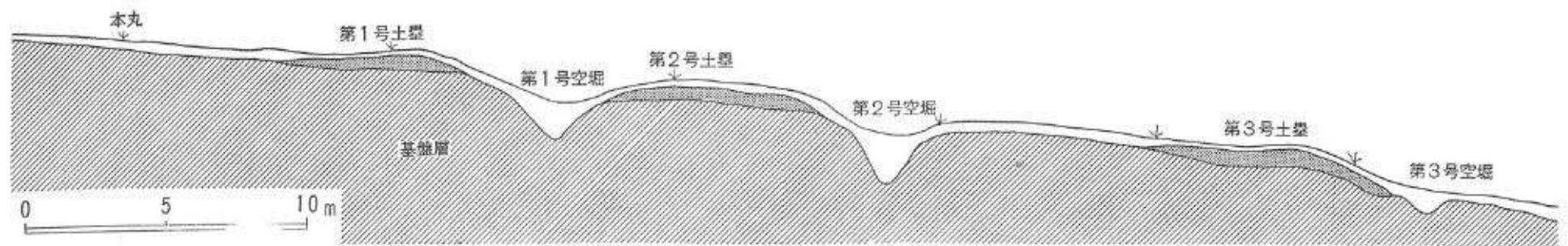
本丸の北側は約6°～8°の緩傾斜をなす尾根で、尾根幅は平均約15mほどで蒲鉾状を呈し、東西両側は急斜面をなしている。この尾根には2本の空堀があり、地表の凹凸によってその存在が確認された。図版第8図上は北尾根から本丸部を、同図版下は本丸から北尾根部を撮影したもので、図版第9図下は本丸東斜面の通路状平坦部を示したものである。本丸の南側をC地点とし、沢状を呈する位置にやや小高い牛ヶ沢双ツ塚が東西に並んでいる。

発掘調査は本丸部分から北側尾根にかけて2m×98mのトレンチを設定し、遺構の状況把握を目的とした。しかし、本丸西側及び空堀の一部がすでにブルトーザーによって攪乱されていたため、トレンチをやや北東方向にふらざるを得なかった。このため尾根の中心を切ることができなかったことは残念であった。

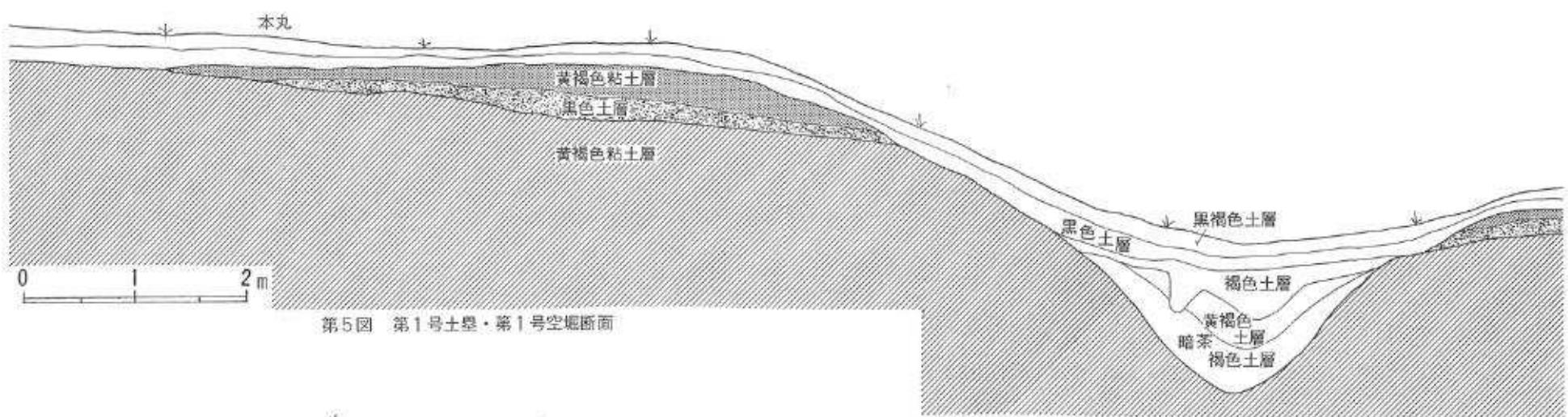
本丸から北側尾根に設定したトレンチで、遺構が確認された部分についての断面図を第4図に示した。斜線部は基盤の黄褐色粘土層で、3本の空堀が掘り込まれ尾根を切断している。空堀は本丸寄りのものから順に第1号・第2号・第3号と名称を付し、空堀の機能をさらに強化する目的で、その南側に土砂を積み込んで土聚状をなし、本丸の防備ラインを敷いている。第4図に示した点々の部分が土砂を積んだ土聚であり、南側から第1号・第2号・第3号と言う名称を付して説明することとする。

本丸・第1号土聚(第5図) 本丸は標高102m、台形を呈する平坦な土地で約385m²の広さを有している。本丸の主軸は北尾根の中心線と一致している。本丸は数年前のブルトーザーによる抜根の為に攪乱されており、地表から基盤層までの深さは一様ではなく、10～30cmの厚さに黒褐色土が堆積している。本丸における基盤層の面に径25cm、深さ10cmの小ビットが2個、南寄り部分で検出されたが柱穴と断定するには至らなかった。

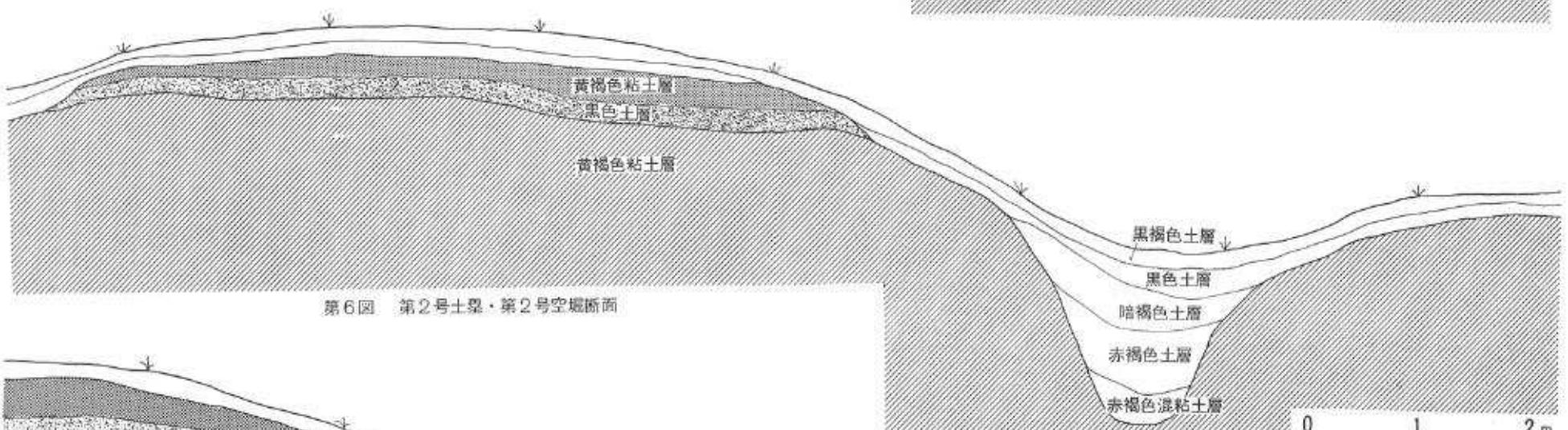
本丸の北端、第1号空堀から本丸への上がり際に土聚状を呈する土砂の積み込み部分が検出



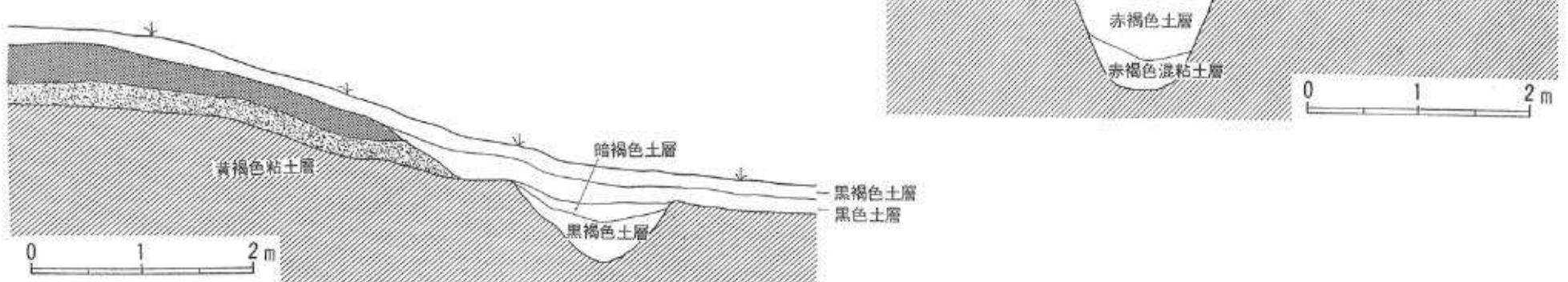
第4図 B地点東壁断面



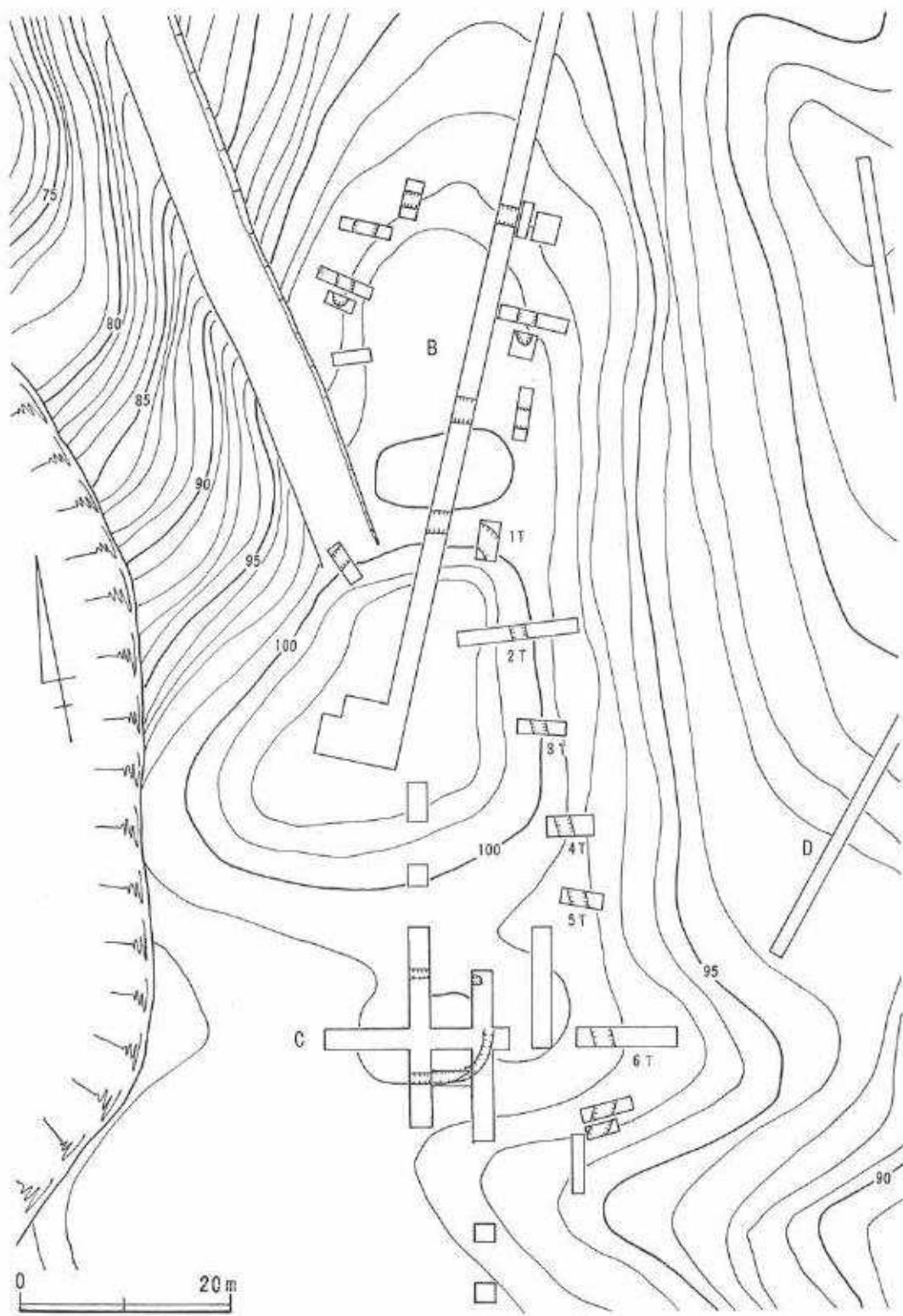
第5図 第1号土壠・第1号空堀断面



第6図 第2号土壠・第2号空堀断面



第7図 第3号土壠・第3号空堀断面



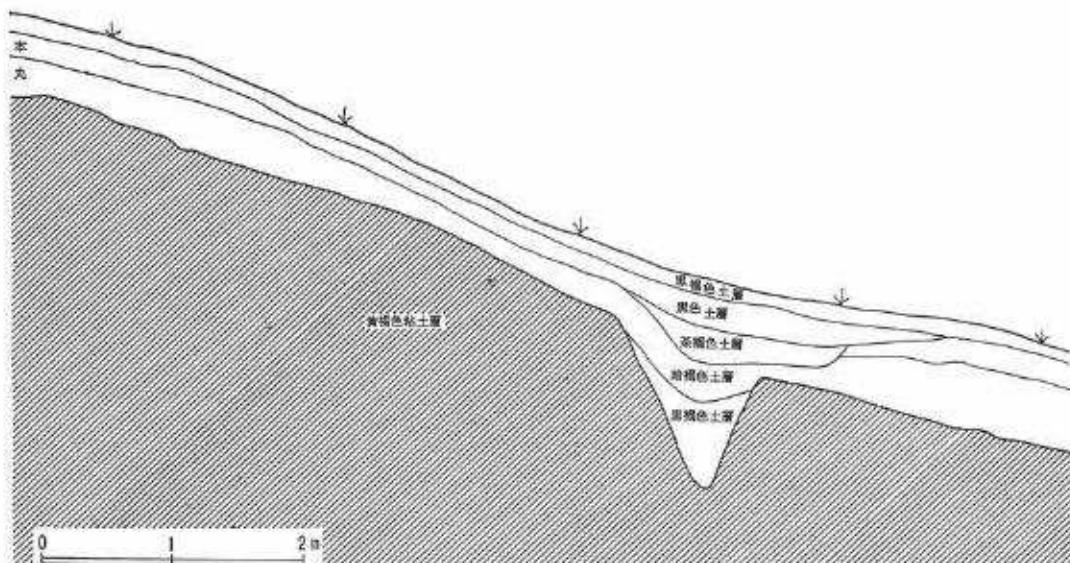
第8図 B・C 地点全測図

され、これを第1号土塁と仮称する。第5図(図版第10図上)の断面が本土塁と第1号空堀の関係を示したものである。表土は草の根及び樹根を大量に含む黒褐色土、2層はやや堅めの黒色土で、この2つの土層は本丸と第1号空堀の上層に整合するもので、自然堆積の腐植土層と考えられる。3層は黄褐色粘土層で厚いところで32cmを計り、南北6.3mの範囲に確認された。トレンチの西側では攪乱により不明であるが、東側へは約3mのびている。4層は黒色または暗黒褐色を呈する土層で厚いところでは20cmあり、木炭片及び土壌器細片を包含している。

即ち、本丸北側部分に暗黒褐色土・黄褐色粘土の順に、約50cmの高さに土砂を積み込んで帶状の土塁を構築したものと考えられる。この黄褐色粘土は基盤の粘土層と同一のものであり、空堀を掘った際の粘土を積み上げている。しかし、現在の高さが構築当時の高さを示しているものとは限らないが、第1号空堀の最下部に落ち込んでいる黄褐色粘土の量は多くない。

第1号土塁の性格は本丸基盤層の北側への傾斜を補正するとともに、第1号空堀の機能を補強することに力点をおいて構築されたものと推考される。

第1号空堀(第5図、図版第10~14図) 本空堀は本丸北側直下に位置するもので、第5図(図版第10図下)の断面図をみると、堀幅は約3.5m、第1号土塁と第2号土塁の落ち際から計測するとその幅は約7mとなる。現地表から堀底部までは1.3m、第1号土塁の頂点から堀底部までの比高2.75mである。堀断面の形態はやや開きぎみのU字形を呈し、堀底部から本丸側への傾角斜度は45°前後であり、途中から30°とやや緩やかになる。北側への勾配もほぼ近似した様相を呈している。この空堀に入り、本丸面へ這いのぼるには道具を使用しないと困難であり、特に雨の日は黄褐色粘土がヌルヌルになって、低い北側でさえものぼれないことを調査員が体験している。



第9図 第1号空堀・2T断面

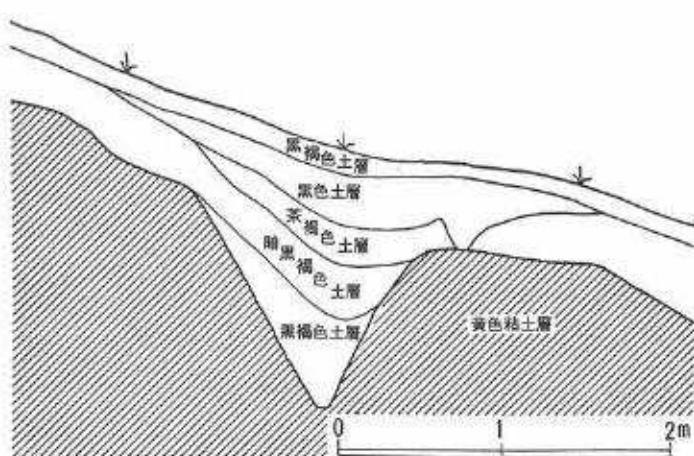
第1号空堀の平面的な走向をみると、トレンチの東4mの位置でほぼ圓丸状を呈して南にまがる(図版第11図)。即ち、本丸の周囲をとりまく状態で構築され、東斜面の標高100mラインにみられる幅2~3mの帶曲輪状をした平坦部が、空堀の埋った地表であるとの確信を得、東斜面にトレンチを設定しながら順次、空堀の走向を追求した。

そのために設定したトレンチとその名称及び空堀の位置については第8図に示してある。

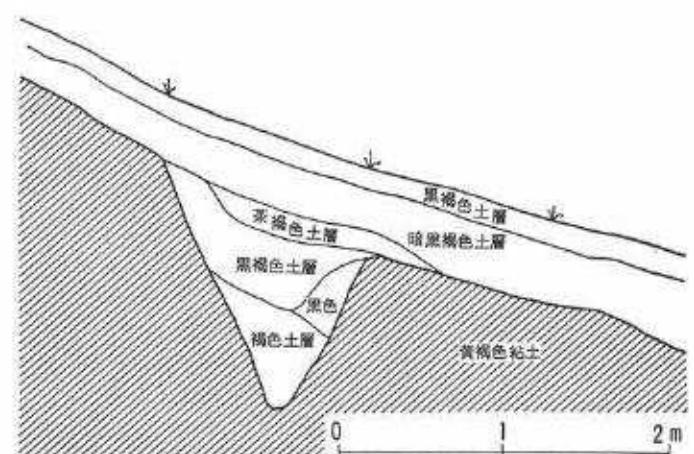
第9図(図版第12図)は2Tで検出された空堀断面である。本丸部分の基盤層は平坦であるが、東斜面では約25°の傾斜をなし、空堀は鋭くV字形に掘られているが、堀底部は幅8~10cmの平坦面をなしている。堀幅1.2m、西側で深さ1.3m、堀底部から65°の角度をなしている。

第10図はこの南側に設定した3Tの断面で、堀幅1.5m、西側で深さ1.3mで、堀底部から約60°の角度をなしている。空堀は薬研状を呈しているが、堀底部には幅10cmの平坦面をなしている(図版第13図)。

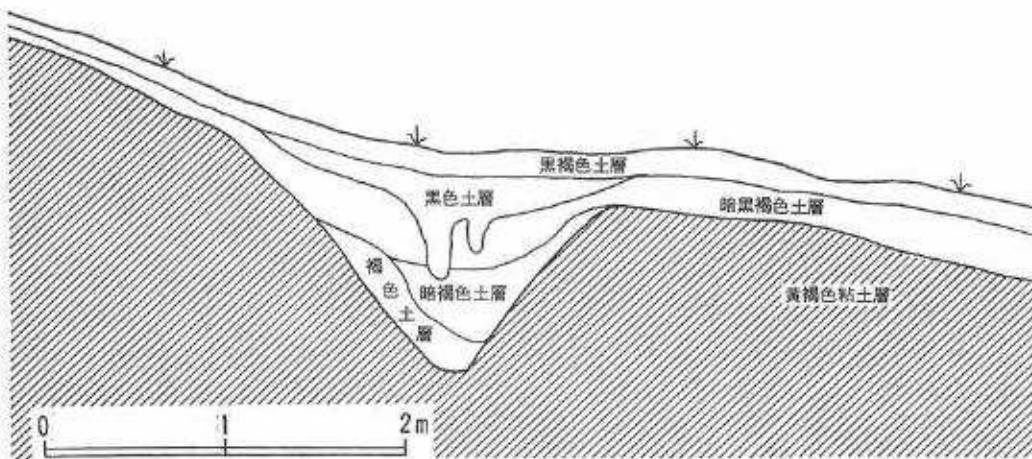
第11図は5Tの空堀で堀幅1.4m、西側での高さ1.5m、傾斜角度及び形状は3Tと同じである。図示しなかったが、1T及び4Tも同じ形状を呈している。



第10図 第1号空堀・3T断面



第11図 第1号空堀・5T断面



第12図 第1号空堀・6T断面

第12図は6Tの空堀で、C地点の牛ヶ沢双ツ塚を東側から回り込むような位置にあり、堀幅2m、深さ1.3mで、約50°の傾斜角度を示している。

第1号空堀は本丸をめぐり、牛ヶ沢双ツ塚の東側を回り込んで南側の沢で消えている。8Tと9Tの間が空堀の末端になるものと考えられる。本丸北西側の10Tでは道路下に空堀の一部が検出され、その西では樹木の密生した急斜面で土砂崩れの危険があるため、発掘は断念した。ボーリング調査では西及び西南部に空堀の存在を確認することができなかった。本丸の西は急傾斜をなしており、空堀構築の必要性はないものと推考される。

第2号土塁（第6図、図版第9図上、図版第14図下） 第1号空堀の北、第2号空堀との間に位置し、基盤層の黄褐色粘土層上に黒色土を積み、さらに空堀部分の掘りあげた基盤粘土を積みあげて構築している。積み込み土壘の高さ50cm、南北幅7.4m、東西13mで、長方形または長楕円とでも称すべき形態である。第2号空堀底部から本土壘頂上部までの比高は3.2mである。第1号空堀と土壘の関係と異なる点はない。

第2号空堀（第6図、図版第15図） 堀幅は約2.5m、第2号土壘の落ち込み部から計測すると約5.5mの幅となる。深さは現地表から1.6m、第2号土壘と堀底の比高は3.2mである。空堀はU字形を呈し、堀底部から南斜面への傾斜は約70°弱で、途中から30°の緩やかな角度になる。空堀の最下部の2層には黄褐色粘土が落ち込んでおり、第2号土壘に積み込んだ粘土が崩壊してずり落ちたものと推定される。第2号空堀は図版第15図上に示した如く、道路に断面が出ており、道路の西側は45°の急傾斜となり空堀の痕跡は認められない。本トレンチの東側5mのところで空堀が消えている。即ち、本空堀は幅2.5m、長さ23mで、東西方向に直線的な形で尾根を切断し、東西両斜面にはおりていない。

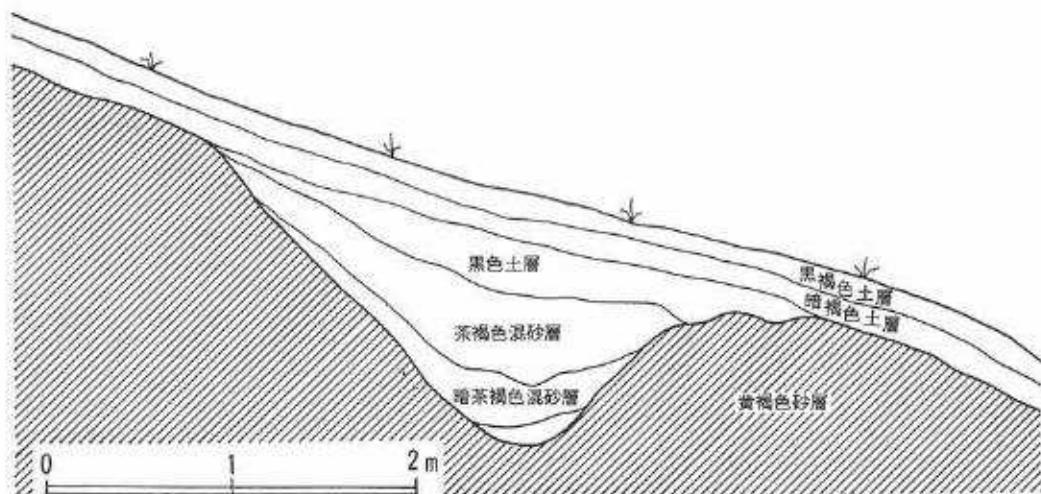
第3号土塁（第7図） 第2号空堀から第3号空堀までの間は約16mあり、基盤層は緩やかに北に傾斜している。第3号空堀のあがり際から南へ約8.2mの間に、土壌状の土砂積み込みが検出されている。第7図は第3号空堀と土塁の関係を示したもので、基盤の黄褐色粘土層上に黒色土、その上に黄褐色粘土が積まれ厚いところでは55cmを計る。第2号と第3号空堀の中間、北側半分にのみ土壌状の積み込みが認められ、東西幅は12m前後と推定される。この土塁については1・2と同様の形状を示すが、地表はほとんど平坦であり凹凸を有していない。

第3号空堀（第7・13図、図版第16・17図） 第7図は第3号空堀の断面で、1・2号の空堀と比べて最も小規模なものである。堀幅は1.5m、第3号土塁の落ち込み際からの幅は3mある。現地表からの深さは85cm、土塁頂上部と堀底部の比高は1.3mで低い。堀の形態はU字形に開く浅い空堀で、堀底部から南斜面への角度は40°である。第13図は西側における第3号空堀で、堀幅3m、深さ1.5mで、傾斜角45°前後である。

第3号空堀の平面形は、第3号土塁を囲むようにコの字形を呈するもので、北東隅が1~2mあいて堀がとぎれている。北側の東西辺は約14m、北西で隅丸状にカーブをして南側へ12mのびる。その南端は図版第17図下に示した如く、緩やかに舟底状を呈してあがっている。東側の南北辺は推定9m、その南端は西側と相対する位置であがり、図版第16図下に示した如く、あがりかたも西側と同様である。

本空堀は土塁における升形に近似した形態をなすもので、1・2号の空堀とは形態・規模を異にしている。以上の如く、3本の空堀が本城跡に伴う北尾根防備の主要な施設であり、他に施設と考えられるものは検出されていない。

(関 雅之)



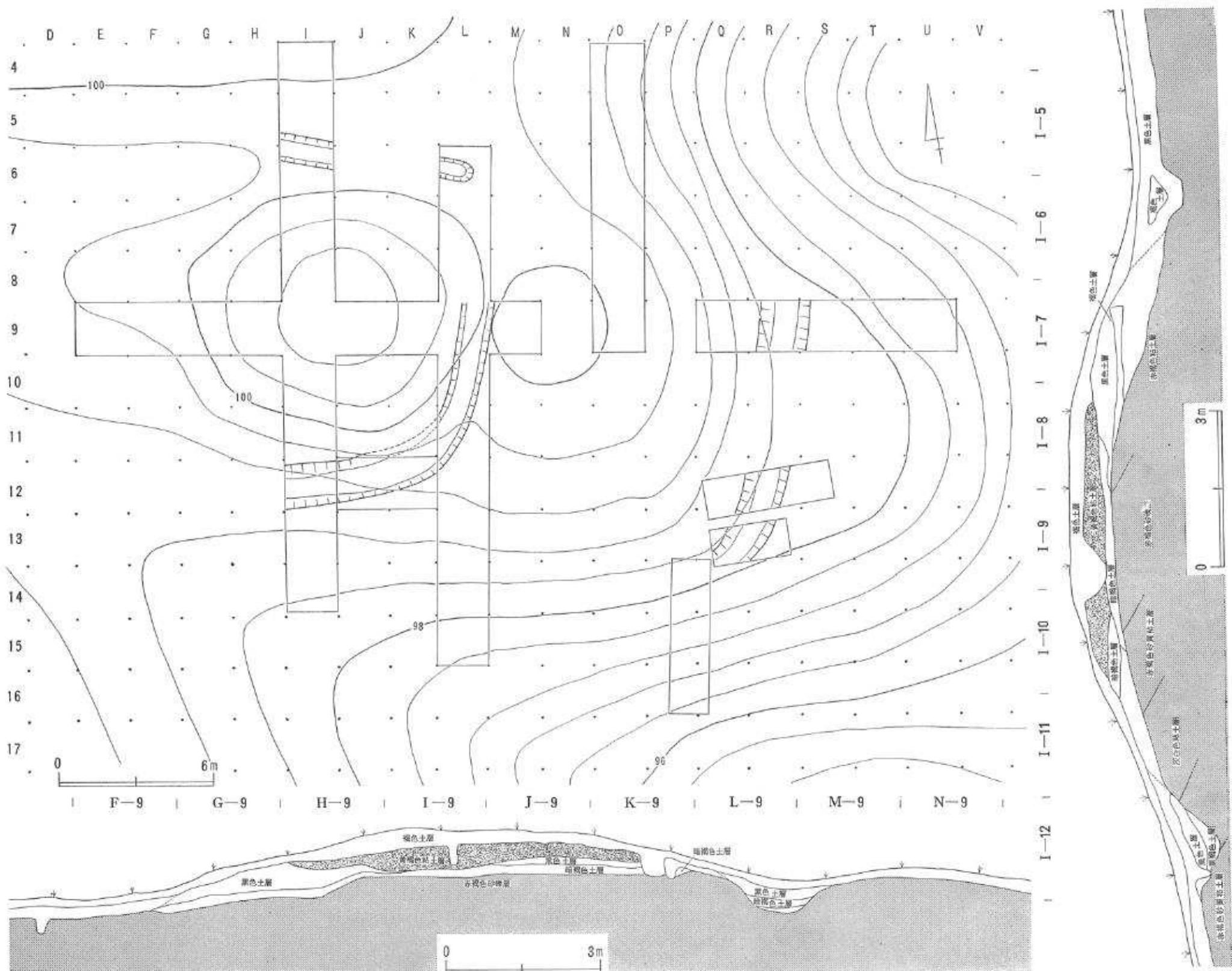
第13図 第3号空堀・西側断面

2. C地点（牛ヶ沢の双ツ塚）の遺構

双ツ塚は本丸の南側、標高100mの西から東にのびる一支稜のつけ根に占地し、南側は急傾斜の沢になっている（第14図、国版第18回）。墳丘上には雜木および杉が繁茂し、塚の形状は瓢箪形をし、外面観察上その中間にくびれが認められたために、便宜的に西から1号塚・2号塚と名称を付した。1号・2号の現状規模は、1号塚が長径11m、短径10m、高さは北側の平坦面より約1.5mを計り平面形態は円形を呈している。2号塚は1号同様円形を呈するが、その規模は小さく、直径約9m、高さも約40～50cm低く1mを計るにすぎない。両者共に頂上部に直径1.5～2m前後の平坦面を有し、特に1号塚の頂上部には若干軟弱な個所があり、盗掘された可能性も十分に考えられた。外面観察からは1号・2号塚共にこれといった損傷を受けた跡痕は見られず、構築時の原形をよくとどめているといえよう。

発掘に際しては塚の内部構造及び周溝の有無を確認することが第一の課題であり、本封土が塚であるか、また城跡に付属する土壘なのか全く不明であった。このために両者の場合を想定してグリッドの設定を行なった。グリッドはN—8°—Eを基線として 2×2 mの基本区画をつくり、1号・2号の中央にその基線がくるようにC地点全域に設定し、西～東に向けてアルファベットを、北～南に向けて算用数字を付し、アルファベットと数字の組み合せをもってグリッドの名称とした。

1号塚東西断面の北壁を観察すると（第14図）、第1層・褐色土層の傾斜角度は東側で12°、西側で14°をはかり、その厚さは頂上部で若干厚い程度で10～30cmをはかる。しかし、東側の2号塚に向うに従って序々に厚くなつてゆく傾向が認められる。第2層以下は積土で、第2層は地山に供給源が求められる小礫を含む黄褐色粘土層である。中央部の最も厚い所で45cm程積土され、西側へ行くに従って漸次厚さを減じて尽きているのに対し、東側は攪乱されているために不明である。第3層は黒色土で往時の地表面とも考えられ、西側の裾部および立ち上がり部で20～50cmの厚さを計りI—9で途切れ、第2層の黄褐色粘土と第4層の暗褐色砂礫層に挟まれて積土されている。また東側でも一部攪乱を受けているが、その厚さは10～20cmを計り堀状遺構で切れている。この黒色土は西側では裾部変換点で、東側では堀状遺構で、はっきりと一線を画することはできなかつたが、状況から判断して分離できるものと考えられる。第4層は暗褐色砂礫層で、基盤の赤褐色砂礫層上面に沿つて積土され、その厚さは13～20cmを計り、F—9、K—9で漸次厚さを増して尽きている。第5層の赤褐色砂礫層は基盤層で、その上面はH—9の東側からL—9の堀の立ち上り上面までは人為的に削平されたものと考えられ、平坦になつており、その水平距離は約6.4mを計る。また、東側の堀の立ち上り上面と平坦面とのなす角度は15°を、西側では第1層の表面上の裾部とくい違つてあるがH—9で約23°を計る。L・M—9で地山を約50cm程掘り込んだ堀状遺構があり、その形態はU字形をし、底面は約70cmを計る。西側では堀状遺構は検出されていない。次に南北断面の東壁を観



第14図 C 地点(双ツ塚)全測図

察すると(第14図)、I—9で攪乱部が見られるのみである。第1層褐色土の傾斜角度は北側で15°、南側で12~16°を計り、その傾斜角度は東・西側の数値に近似し緩やかである。頂上部および南側で20~30cmの厚さを有するのに対し、北側ではわずか15cmを計る。特に厚く堆積しているのは、南側が沢に面しているためで頂上部より流れた可能性があり、本来頂上部は若干高かったものと考えられる。第2層の小礫を含む黄褐色粘土層は、中央部の最も厚い所で約40cmの厚さを有し、I—8、I—10で次第に厚さを減じて途切れている。第3層は黒色土であるが、北側では粘土ブロックを含む褐色土を挟んで存在し、40~70cmの厚さを有している。南側ではI—10から沢にかけて見られ、南へ向うに従って厚い堆積をしている。南側ではI—10で粘土ブロック及び小礫を含む暗褐色土層が見られ、その南側の積土の角度は第2層、第3層の積土角度に酷似している。北側の黒色土に挟まれて粘土ブロック・小礫を含む褐色土が、約12cmの厚さを有して水平に積土していることからも黒色土は2分されるものである。しかし、堀の立ち上がり上面では、東西断面と同様別けられるものであろうが、調査時点の観察では不明確であった。第4層は小礫を含む暗褐色土で、第5層の地山面の平坦部にのみ積土され、その厚さは約20cmをはかる。第5層は基盤層であるが、南側へ約30°の傾斜角度を有する地質構造をしており、C地点西側の崖面の観察に一致している。基盤層は平坦に削平され、その水平距離は3.45mを計り、南斜面は3.1mの長さを有し、崖の立ち上り上面と平坦面のなす角度は約15°を、北側斜面は4.4mの長さを有し、その角度は約15°をはかる。I—5~6、I—12では壇状遺構が確認され、北側のものは幅1.25mを計り、地山面を40cm掘り込んだU字形のものである。南側のものは幅1.85mを計り、地山面を北側で95cm、南側で約60cmを掘り込んだもので、U字形を呈し、底面は60cmを計り、その立ち上り角度は47°をはかる。充満土の上の黒色土は東西断面の壇状遺構と同じく流入土と考えられる。尚、本塚では内部主体と考えられる遺構は検出されなかった。

以上の結果をまとめると、本遺構は壇状遺構を境として考えるならば、長径14m内外をはかる円形のもので、裾部に裾がめぐっているものである。裾は一部とぎれている所があり、その立ち上がりは本丸の北側で確認された2号・3号空堀の立ちあがりと同じ形態を呈している。1号塚は地山面が人為的に削平されており、その平坦面は南北3.45m、東西6.4mを計る土壘状の作り出しを行なった後、暗褐色土、黒色土、黄褐色粘土が積土され、更に褐色土が堆積して現在の塚状の形態を呈すようになったものと考えられる。積土は土壘状の作り出しの上に直接積まず、意識的にずらして積土している。ずらす事によって、その主軸が東に続く支継の主軸に一致し、また、南側は沢に面しているため、より急斜面を形成したものかと考えられる。ましても、本遺構には塚としての内部構造はなく、また塚に対する伝承や信仰も全くなく塚と考えるよりも、形状・積土の層序など基本的には本丸の北側に検出された土壘、空堀の形態に酷似し、南側防備の土壘と考えた方がより妥当であると考えられる。

(戸根与八郎)

3. D 地点の遺構

D地点は本丸東斜面下の平坦部で、標高93mから88mの間に位置している。第18図に示した如く、この平坦部は南北約90m、東西約25mで、西側には本丸、南北の両側を小尾根が囲んだ鞍部で、自然の障壁によって北西季節風をさえぎっている。D地点の南西部、標高93mの位置に12×17mの平坦地があり、その下段には15m×15mの平坦地、さらにその下方に15m×30mの平坦地が位置し、上中下3段の平坦地が階段状に配列されている。上段から中段にかけて、1.5m×28mのD1号トレンチを、中段から下段には1.5m×48mのD2号トレンチを設定し、南側から2mごとに区画をして番号を付した。D2号トレンチ17区から東へ1.5m×18mのD3号トレンチを設定し、東端部の状態を把握せんとした。

第15図はD1号トレンチの断面図である。地表面は北に向って緩傾斜をしているが、基盤層はほぼ水平であり、上段は平坦に削平されている。中段に至る斜面は約20°の勾配をもち、上段と中段の比高は約3mである。また、中段との境は明瞭に作り出されており、自然に形成されたものではない。上段のD1号トレンチ5区、深度35cmから図版第21図上に示した土師器片がまとまって出土し、6区では縄文中期土器片が1片検出されている。中段のD1号トレンチ13区では中世後半の陶質土器片が検出されたが、遺物に時代的な開きが大きく不安定であり、遺構との関係が一致しない面をもつ。

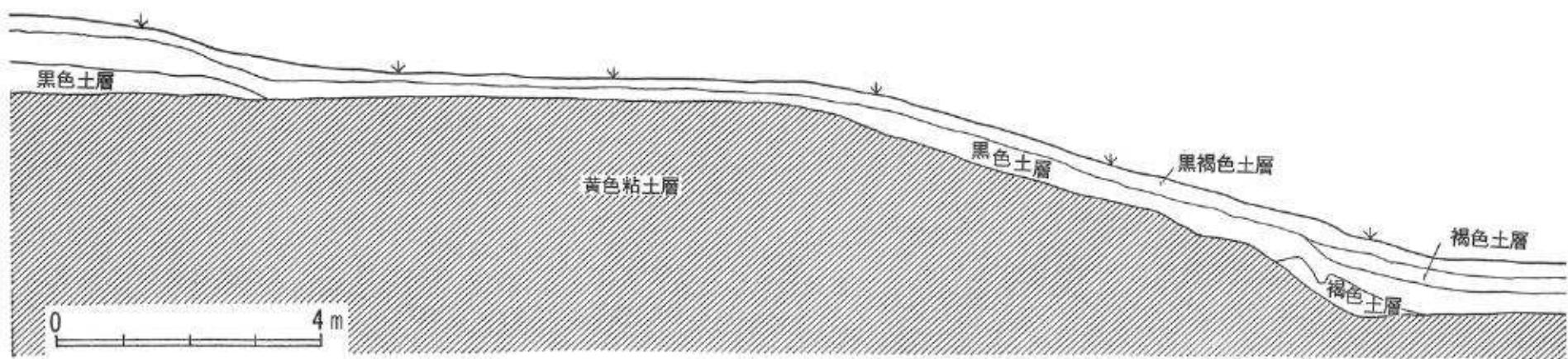
第16図はD2号トレンチの断面で、第16図は中段から下段にかける部分である。発掘の結果、中段は12m×13m位の小削平地で、下段への勾配は15°～20°の緩やかなものである。下段は低い位置にあるため腐植土の堆積も厚く1m前後で、基盤層はごく緩やかに北側へ下っている。第16図のD2号トレンチ17区を頂点とした基盤層の高まりがみられるが、土砂の積み込み等は見られず人為的なものか否か判断に苦しんだ。自然の凹凸を削平して土壘としたものかとも考えたが、本城跡における土壘のあり方と相違するものであり、否定的な立場をとらざるを得ない。

D地点の東側急斜面に近接した縁の部分に、土壘状の微高地が南北に走っている。この微高地を分断するため、D2号トレンチ17区を東にのばし、1.5m×18mのD3号トレンチを設定した。第17図がその断面図である。基盤は黄褐色砂礫層と黄色粘土層であり、人為的な土砂の積み込み状態は認められない。雜木が密生しており抜根のため基盤層に凹凸が多いが、傾斜角度にやや人為的な削平を感じさせる程度で、積極的に土壘とする論拠はない。全体的な曲輪の構成から考えて、土壘があってもよい位置である。

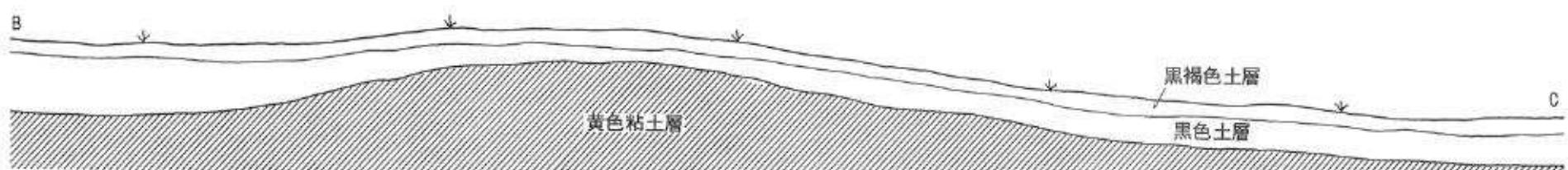
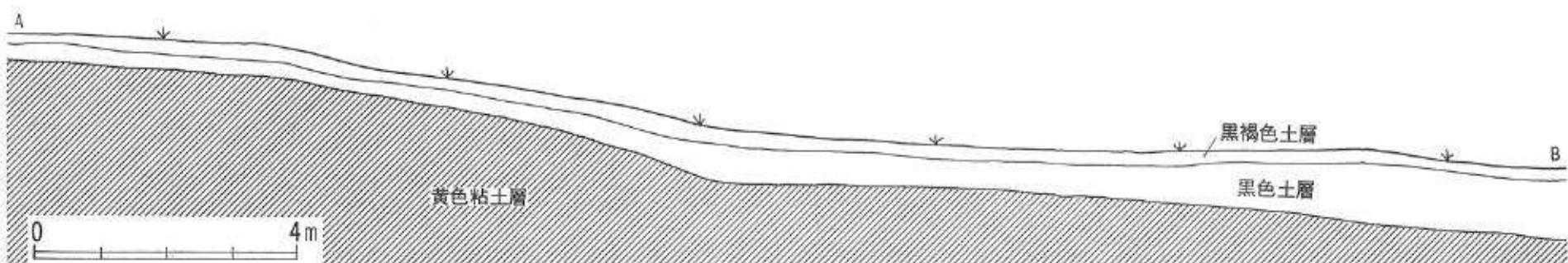
D地点は本丸に次ぐ平坦地であり、本丸との比高は約10mを計る。西及び南北の三面を尾根で囲まれた曲輪であり、3段の削平地が南北に並べられて構成されている。また、本丸とは第1号空堀によって遮断されている。

このD地点東斜面の沢に2箇所の湧水があり、距離的にも20～30mの位置で、水量も比較的多い。

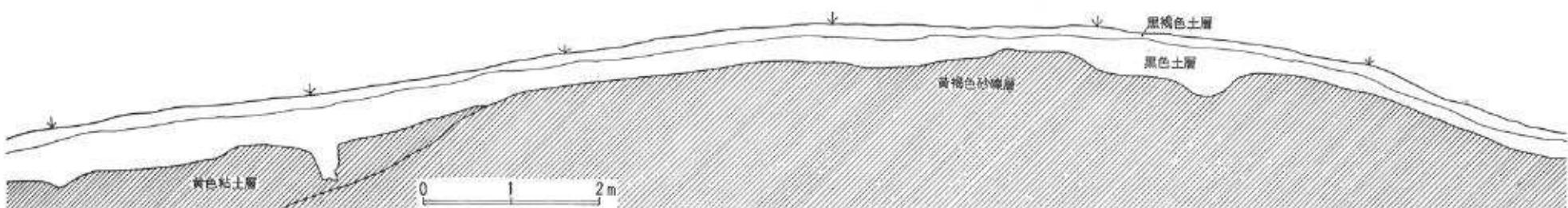
(閔 雅之)



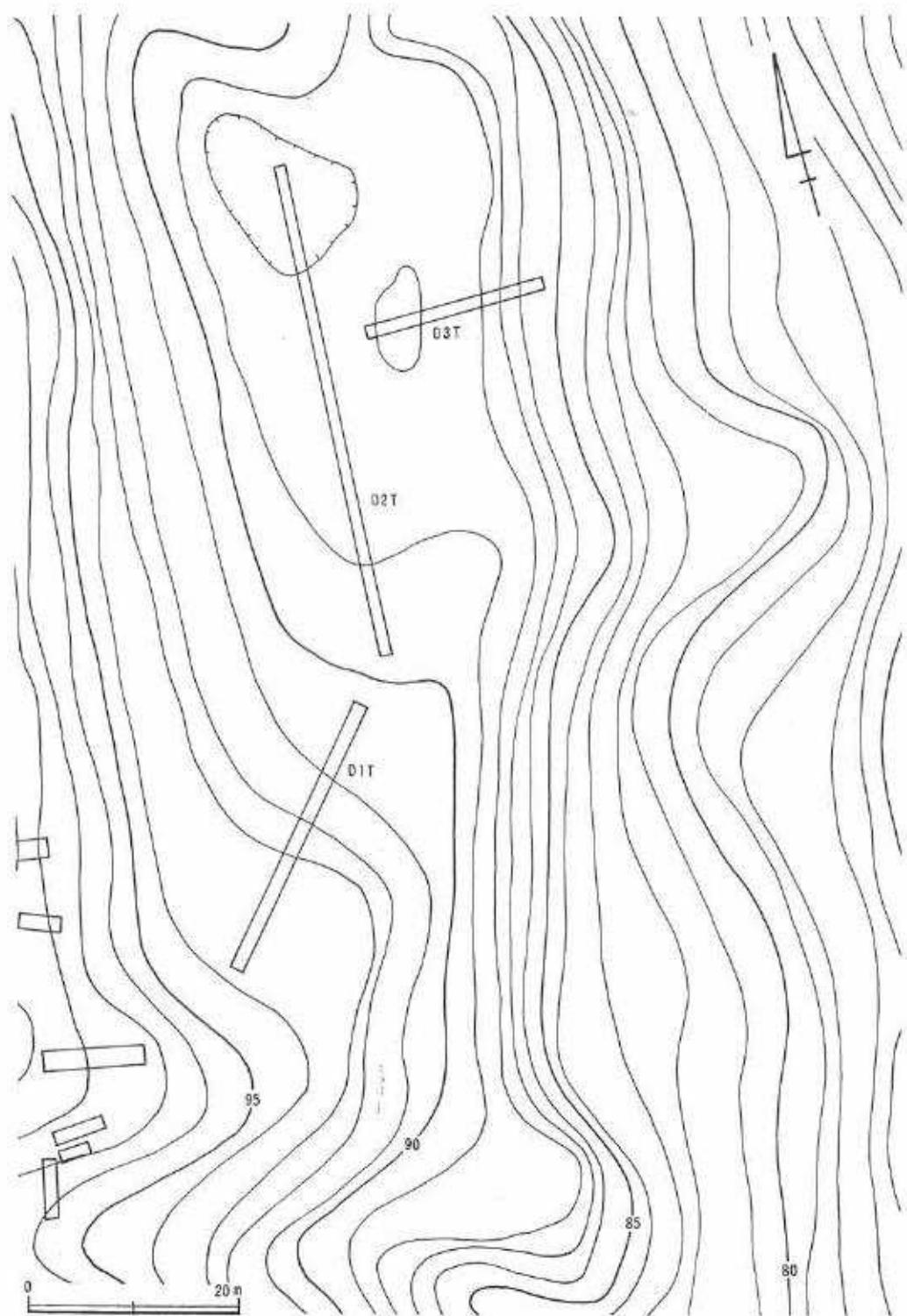
第15図 D地点・第1号トレンチ断面



第16図 D地点・第2号トレンチ断面



第17図 D地点・第3号トレンチ断面



第18図 D 地 点 全 測 図

IV 出土遺物

本遺跡より出土した遺物は、縄文土器(3)、土師器(1194)、中世陶質土器(3)の3種の土器類と石製品である。これらの遺物は出土地点を異にし、縄文土器は本丸の東～南側にかけての斜面及びC地点のI—5～8で、土師器は本丸の北側およびC地点の堀中、D地点の1号トレンチから出土し、中世陶質土器は本丸からC地点にかける南側の斜面及びD地点から出土している。遺物は破損・欠失した状態で検出され、個々の形態を把握するには難点が多い。

1. 縄文土器(第21図1～3、図版第22図1～3)

1は菱形土器の破片と思われ、実帶文と平行隆起線文が施され、本県の馬高式に併行する土器で、東北地方の大木系の要素を多分に含んだ土器と考えられる。2は網状文、3は斜行縄文が施文されている。

第19図はチャート質の有柄石鏃で断面は菱形をし、中軸線に向って左右から精巧な剥離調整が行なわれている。図版第23図19は、砂岩質の石皿残欠で中央部を研磨して大きく凹面をつくっている。これらの石製品は、縄文土器とほぼ同時期のものと考えられる。

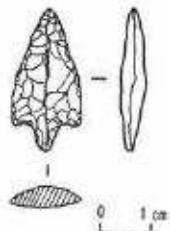
2. 土師器

破片からの復元実測が多いために全体の器形を正確に把握し得るものは一点もない。古式土師器と平安時代の土師質土器の2種に大別でき、前者を第Ⅰ群土器、後者を第Ⅱ群土器とする。

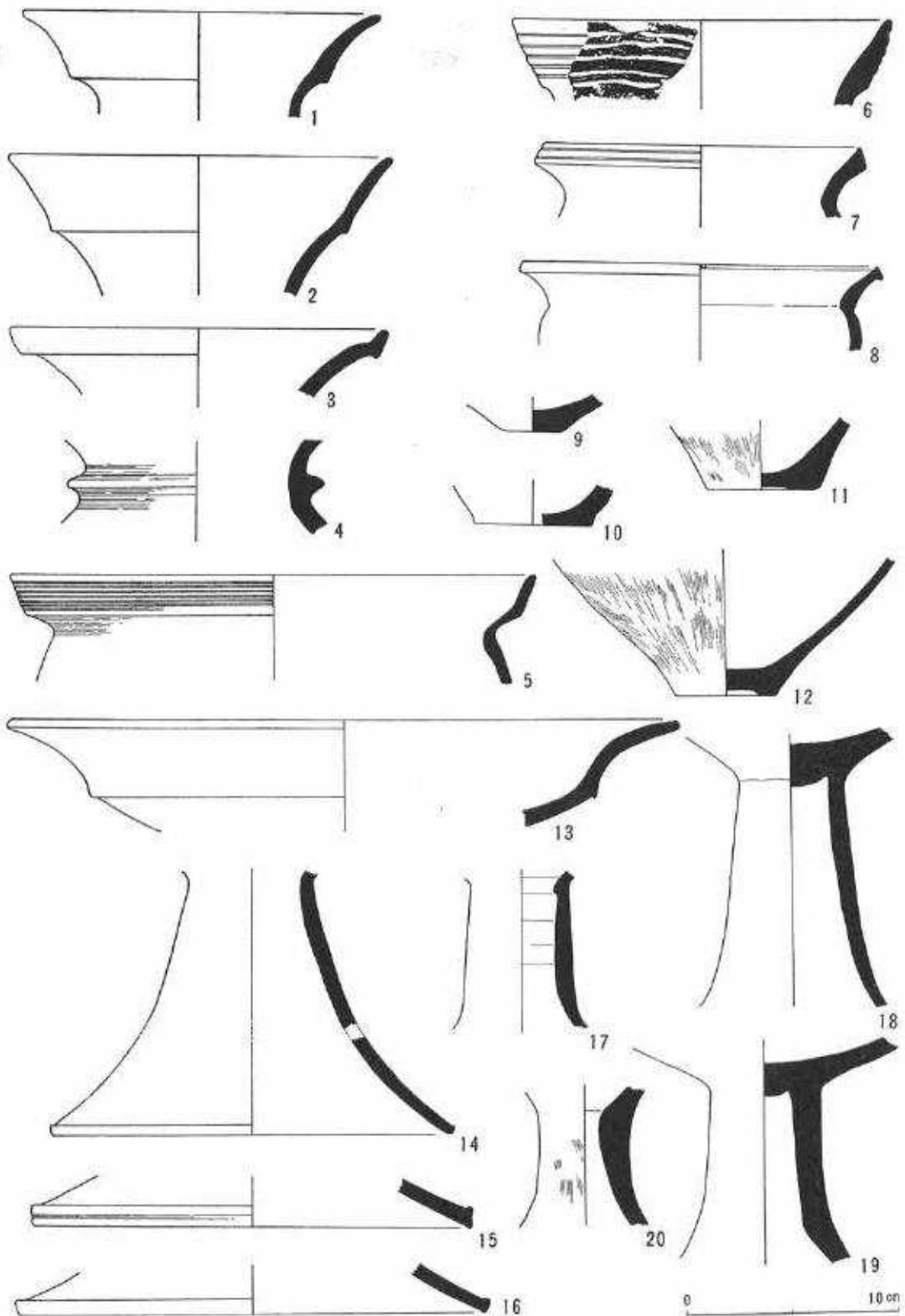
第Ⅰ群土器(第20図1～19、第21図5～16、図版第22図4～25、図版第23図1～8) 本群は壺形土器、菱形土器、高杯形土器、器台形土器に別けられる。

壺形土器(第20図1～4、図版第22図4～9) 口縁部の形態は複合口縁を呈し、口縁帯が無文のものと凹縁があぐるものとがある。1・2は口縁が大きくラッパ状に開いて外反する土器で、頸部との境に顯著な折返しの段をもつ。器面は箆状工具で丁寧に縦横に研磨整形がなされている。1の表裏両面には丹が塗布されている。3は1・2に比して口縁帯が狭く、口唇部に丹が塗られている。頸部には刷毛目状整形痕が見られる。4は頸部に凸帯が一周し、表面には丹が塗られている。器肉は厚く暗赤褐色をし、胎土は精選されている。図版第22図6・7は幅広の口縁帯に平行凹線があぐるもので、6は幅5cmで9条、7は幅3cmで9条浅く施されている。6の表裏両面には丹が塗布されている。共に胎土は比較的精選され、6は褐色、7は暗褐色を呈し、内面に横テテ整形痕が見られる。

菱形土器(第20図5～8、図版第22図10～14) 口縁部の形態から複合口縁を有するものと単純口縁とに別けられる。5は口唇部が肥厚し、口縁部の傾斜角度が鈍角的になり口縁帯に7条の凹線文が櫛歯状工具で深く施されている。器壁内面は箆で削られており、口縁帯および器内面には丹が塗布されている。6は5よりも厚い口縁で、わずかに内彎ぎみに傾斜する土器である。



第19図 石鏃



第20図 出土遺物

口縁部には棒状工具によるダレた5条の凹線が浅く施されている。内面には横ナデ整形痕がみられ、色調は橙褐色を呈する。7は整形上内面に凹帶が生じた結果、口唇の先端が上に向って立あがる土器で、口縁部には2条の浅い平行凹線が施されている。内外面に横ナデ整形痕が顕著にみられる。図版第22図12は口縁部と頸部のくびれが7よりも大きく、口縁部には3条の平行凹線が浅く施され、頸部以下には斜行する櫛目状の整形痕が施されている。8は口縁部が外反し、口唇部が外削ぎ状を呈し胴部の最大径が胴上半にきて、わずかに肩の張る土器である。頸部以下には8~9条を一単位とした刷毛目文が部分的に見られる。口唇部および内面には丹が塗られている。

高坏形土器（第20図13~19、図版第23図1~7） 13は坏部が大きく広がり、中間に段を持ち、内面は箆状工具で削り取られ、外面は研磨整形がなされている土器である。14~16は脚部の裾で、裾が大きく左右に開き裾下部で稜を有する。14は孔を有するか否かは、器面が荒れているため不明で、整形についても定かではない。17~19は坏部と脚部がやや直角に近い角度で接合し、円柱状の脚の下方で裾を大きく広げるものである。外面には化粧粘土をかけ、箆による縦位の研磨が見られ、特に接合部付近は顕著である。内面には箆削りが見られ、18~19には接合部に突起があり、所謂「組み合せ成形技法」を採用している。

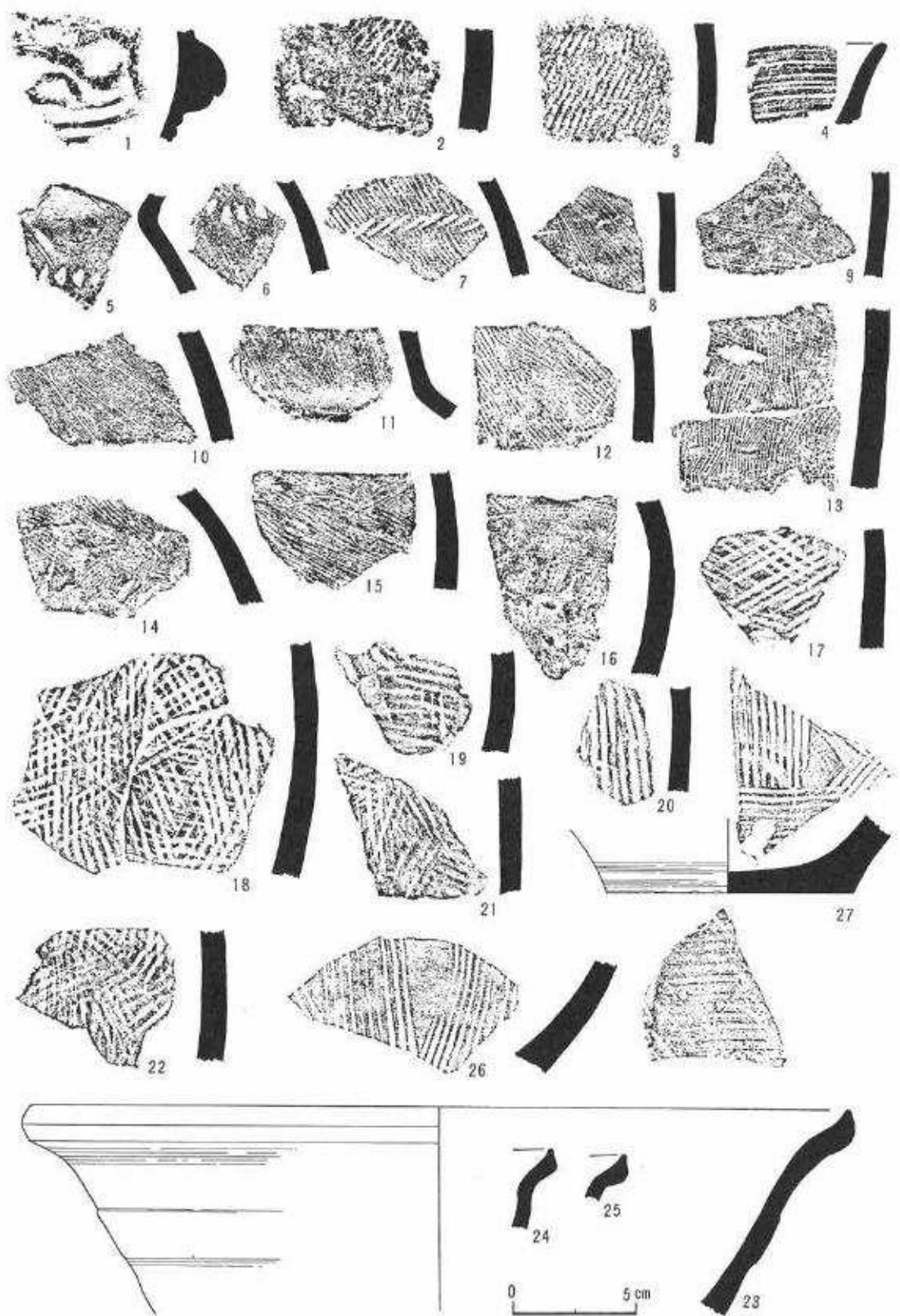
器台形土器（第20図20、図版第23図8） 器受部を欠き脚部上半のみで全体の器形は観えないが、器面には櫛目文を6~7条一単位として施した後、箆で全体を研磨している。このため櫛目文は部分的にしか見られない。内面には箆削りと縦位のナデ整形痕をとどめている。

胴部及び底部（第21図5~16、第20図9~12、図版第22図15~25） 5~16は甕もしくは壺形土器の破片で、器面には刷毛目もしくは櫛目状の整形痕が施されている。5・6は櫛齒状工具で、7は棒状工具で列点が押捺されている。22・23は研磨された器面に丹が塗られている。第21図11は高坏の脚部破片かとも思われる。9は平底というより丸底に近いもので、器面は箆状工具で研磨されている。11・12は底部近くまで刷毛目が施され、器面にススが付着している。底面には指頭で押し上げた程度の凹みを有し、あげ底風を呈する土器である。

第Ⅰ群土器（第21図17~25、図版第23図9~15） 本群は平安時代の堀形土器と叩目を有する土器で、23は口径33cmをはかり、口唇部の先端が上に向ってわずかに立あがり、頸部のくびれは少なく、丸味をおびて底部に至る堀形土器である。胴部には箆削りが、頸部及び内面にはロクロ目が見られる。24・25も堀形土器で胎土に砂粒を含み、橙褐色を呈し、焼成は堅緻である。18~22は叩目を有し、堀形土器の胴下半もしくは變形土器の胴部に付くものと考えられる。

3. 中世陶質土器（第21図26・27、図版第23図16~18）

26・27は摺鉢片で、26は摺目幅3.7cmで11条の摺目を一単位としている。摺目間隔は粗く、断面はU字形を呈し浅い。底面には静止糸切痕がみられ、色調は鵝灰色を呈す。26・27共に外面にはロクロ目が顕著に見られ、内面は磨減して円滑になっている。図版第23図16は壺形土器の破片と思われ、鵝灰色を呈し胎土・焼成共に良好で内面にロクロ目が見られる。（戸根与八郎）



第21図 出土遺物

V 総 括

1. 見付支城について

見付支城と大平城との位置関係は第1図及び第2図15に示してあるが、すでに土砂採取によって破壊され、その姿をとどめていない。ここに昭和33年6月に踏査した見付支城の概要を紹介し、附近の城砦との関係についてふれてみたい。

見付支城は觀音山丘陵北端の山嘴に位置し、西方に平野を展望し、北方は見付本城と相対し、北方山尾を封する位置を占め、総構えおよび大手口と本街道を瞰制するうえで好適な位置にある。大手口付近からの比高は約50mで、ここに一群の城郭遺構が存在し、本城跡南側の標高102mの尾根には大平城跡がある。

城跡の立地する地形は瓢箪形または前方後円墳に似た形状をし、後円部に主陣地(本丸)、前方部に前衛陣地を配し、主陣地の背後にも後衛の小郭が存在する。主陣地は東西40m、南北50mほどのほぼ長方形をした城台で一段高く構えている。この南と北は深い堀で遮断され、東側下方には幅6m前後の腰曲輪を設け、西側は約8m下方に9条の敵形阻塞を配している。東側の腰曲輪には南端・中央・北端に各2条の連続した堅堀で掘り切った備えがある。西側の連続する敵形阻塞は見付本城、大場沢城などと同一技法で構築されたものであるが、それよりやや小規模で、堀間の土塁も狭小である。

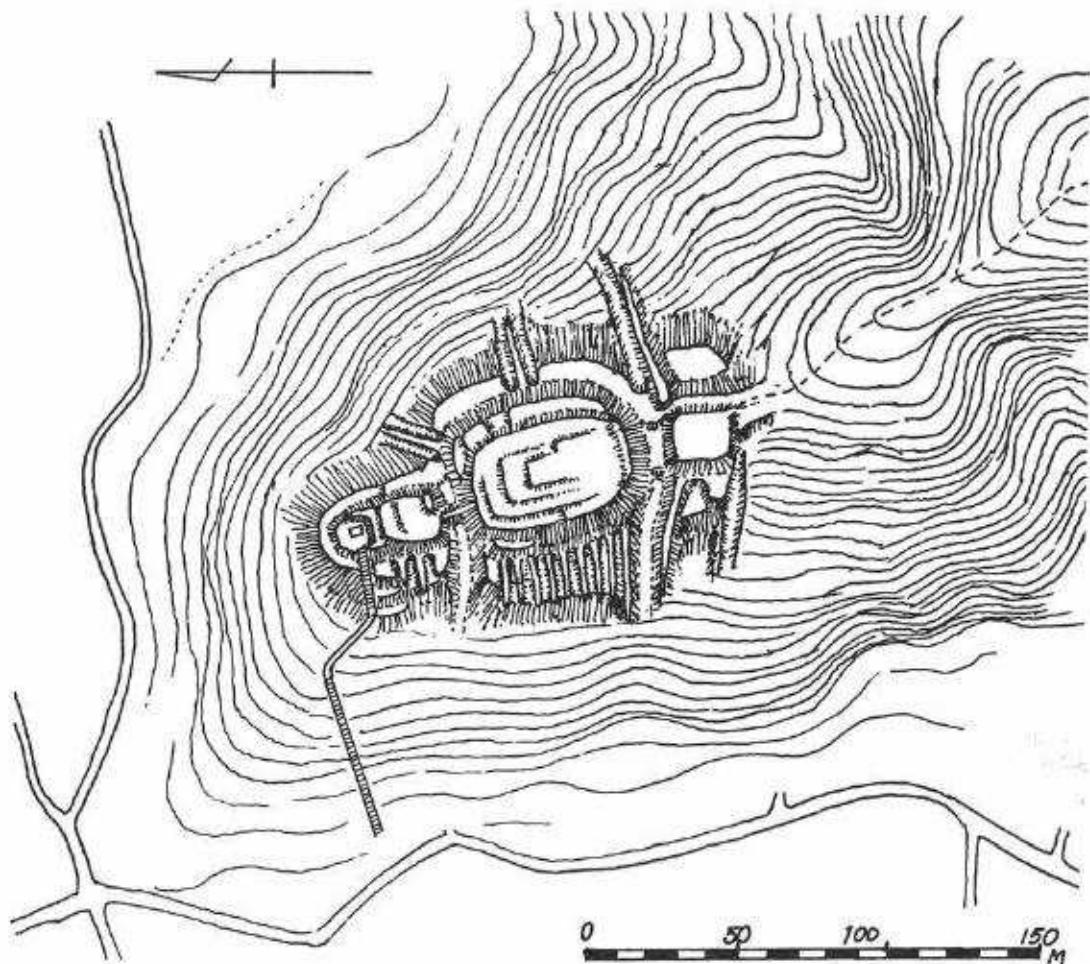
空堀をへだてて北に連なる前衛陣地(二の曲輪)は東西15m、南北35mほどの城台をなし、南部と北部の2区画にわかれ、北側は神社の社地となっている。この部分は神社建立の際に地形を掘り下げ、崖を切りとったものと考えられるので、旧状は南部と同じ高さで一体となっていたものであろう。この郭の下方5~6mに、東・西・北の三方を幅5~6mの腰曲輪がとりかこむが、西側には主陣地と同様の敵形阻塞が3条設けられている。主陣地の南側には土塁があり、内側21m、外側7mを計る。

空堀をへだてて背後の尾根につづくが、堀ぎわの西に20m×20mの壇形をした区画がある。その東側には幅2mほどの道形が南へゆるやかにのぼり、やがて急傾斜の崖面に至り、ここにはもう施設はない。前記急崖の東下方の凹所に北面して、3段の小平地が認められる。

本城跡は小規模ながら、室町時代後期の特色をもつ防御機能をよく具備したものであるが、独立した存在ではなく、見付本城の本丸と相似点がみられ、同城の支砦として一体不離の施設であると考えられる。

第22図は上記の見付支城の略測図で、巻尺および眼高計測による図面であることを明記しておく。

(伊藤正一)



第22図 見付支城略測図

2. 大平城跡（牛ヶ沢双ツ塙を含む）出土遺物

本遺跡出土の遺物は、大別して4時期に分けられるが、その出土状態に安定性がなく、同一個体がまとまって出土する例はほとんどまれであり、個々の破片が単独で包含された状態で、分布密度にも差異があり、正常な遺物包含状況を呈しているものと考えることはできない。この異状な包含層がある時点で形成されたものか、正常な包含層がある時点で異状な状態を呈したものかいずれかであろう。このため遺物自体に制限がありセット関係を明確に把握することはできない。以下、県内および他地域の資料と比較・検討をしながら記述することとする。

県内での古式土師器に関する研究は、弥生時代の終末期の問題として千種式土器の編年的位置づけをめぐって論が進められ、^(註1) 小出義治氏や吉岡康暢氏等の努力によって北陸地方の古式土師器に対する問題点が具体的に提起された。両者の間には弥生式土器と土師器の移行期にあたる月影式土器の把握の仕方においても方法論上の相違が見られ、まだ多くの問題をかかえてい

^(註2) 小出義治「北陸地方の古式土器」

^(註3) 吉岡康暢「北陸地方の古式土器」

^(註4) 吉岡康暢「北陸地方の古式土器」

るのが現状である。その後、上原甲子郎氏等によって千種式に対比される縦立Ⅱ式土器が提唱された。この他に断片的資料は数多くあり、資料的には増加の傾向を示しているが、セットとして把握されるものはほとんどなく、まして土器集成の段階にまで至っていないのが現状である。

本遺跡出土の土師器の第Ⅰ群土器は、一括資料として取り扱うことには問題を有するが、県内における古式土師器として重要な位置を持つものと考えられる。器形は壺形土器、甕形土器、高壺形土器、器台形土器の4器種あり、これ等の特徴的手法は籠磨き、籠削り、凹線文、刷毛目文などであり、北陸地方における弥生式土器終末から古式土師器にかけて普遍的に見られるものである。また甕形土器に加えられた列点は、弥生後期の小松式や竹ノ花式土器にみられる手法で、その下限は古墳時代の月影期までである。当然、本遺跡出土の第Ⅰ群の土師器は後者(註6)の範疇に属するものであり、形態的・整形技法的にも千種遺跡、中山南遺跡等で出土している土器に近似している。その年代を吉岡康暢氏の編年に従えば、北陸の土師器の第一様式に属するものであろう。本土器群は、地域的様相の濃い汎北陸的土器といえようが、時間差・地域差の問題は今後の資料の増加によって検討されなければならない。なお、壺形土器1・2は器形的な特徴から時期がやや下降する要素をもっている。

第Ⅱ群の土師質土器は、従来土師器と呼ばれてきたものとは明らかに器面整形・胎土・焼成が異なり、須恵器の器面整形・胎土に極めて近似しており、土師器と称するより須恵器の生焼(註8)といつた方がより妥当と思われる。北陸地方では三浦遺跡中層、矢田新遺跡、小森谷遺跡などで、また県内では9~10世紀に比定されている狼沢第2号窯跡、半ノ木遺跡、中才遺跡、市助浦遺跡から堀形土器が出土している。吉岡康暢氏は三浦遺跡出土土器の編年的考察の中で、

「三浦中層土器は供膳・貯蔵形態は須恵器、煮沸形態は土師器という器種による明瞭な機能分化が認められる。」と指摘し、「和氣第一号窯では少量ながら土師器と同一器形の甕・堀を焼成している。」と述べられ、更に「このことがただちに土師器工人が須恵器工人に吸収されていったことを意味しないとしても、須恵器と土師器の成形技法、煮沸形態の共通性、土師器にみる器形の著しい規格化、須恵器の占める量的比重の重さから両工人集団が緊密な技術交流を通して接触しつつ生産性の向上をはかっていたと想察せざるをえない。」と述べている。

本遺跡の土器は堀形土器一種のみであるが、その年代は、平安時代の前半に求められるものであろう。本土器群は、窯跡と集落址との流通上の問題点はあるが、製品として充分に流通していた可能性が多分に想定される。

中世陶質土器は、石川県の珠洲古窯の一群と酷似するものであるが、県内で発見されている平安時代末期から鎌倉時代後半の経塚出土の摺鉢とは摺目の施文が明らかに異なっている。また、珠洲焼の後半に対比されている観音堂遺跡、堀越館、釈迦堂遺跡出土の摺鉢とも摺目の施文特徴が若干異なり、摺目は粗く太くなり、わずかに空間を残して内面全体に施されていることなどから、年代的には室町時代後半かそれよりやや降り戦国時代に属するものと考えられる。

(戸根与八郎)

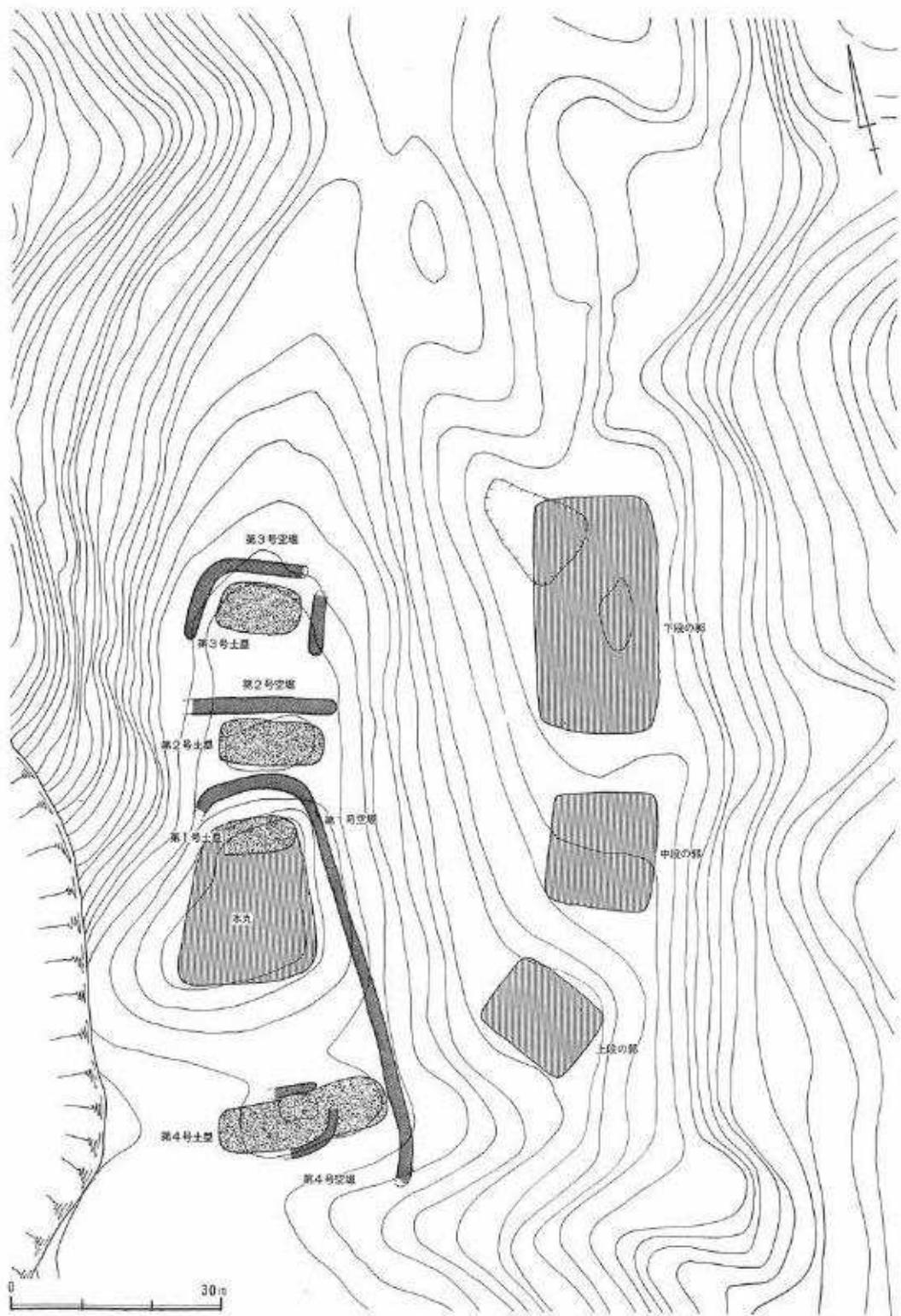
- 註 1 小出義治「第3章 文化遺物」(大場将雄編『千種』新潟県教育委員会) 昭和28年
 2 小出義治「佐渡に於ける後期弥生式文化の限界」国学院雑誌第56巻第2号 昭和30年
 3 小出義治「北陸の古式土師器と二三の問題」国学院高校紀要4 昭和37年
 4 吉岡康暢「北陸における土師器の鉛年」考古学ジャーナル3月号 昭和42年
 5 上原甲子郎・礪崎正彦・永峯光一「越後諸島立遺跡における古式土師器について」考古学雑誌第52巻第3号 昭和42年
 6 小島俊彰『小杉町中山南遺跡調査報告』富山県教育委員会 昭和46年
 7 註4に同じ。
 8 吉岡康暢「第3章 出土遺物」(『加賀三浦遺跡の研究』石川県教育委員会) 昭和42年
 9 小村 茂『加賀矢田新遺跡の第1次調査』小松市立博物館研究紀要第6集 昭和46年
 10 富山県教育委員会『小矢部市小森谷遺跡調査報告書』昭和48年
 11 中川成夫・川上貞雄・土井義夫『新潟県北蒲原郡笹神村狼沢窓跡群の調査』笹神村文化財調査報告4 昭和48年
 12 本間信昭「南蒲原郡栄村半ノ木遺跡調査報告」(『埋蔵文化財発掘調査報告書I』新潟県教育委員会) 昭和48年
 13 上原甲子郎『中才遺跡の概報』西川町教育委員会 昭和40年
 14 小村 弘『考古学よりみた亀田町』(『亀田町史』亀田町公民館) 昭和34年
 15 本間嘉晴・計良勝寛「粟島の考古」(『粟島』新潟県教育委員会) 昭和47年
 16 中川成夫・岡本 勇・加藤晋平「水原郷の遺跡・遺物」(『水原郷』新潟県教育委員会) 昭和46年
 17 関 雅之「西蒲原郡黒崎町糸迦堂遺跡調査報告」(『埋蔵文化財発掘調査報告書I』新潟県教育委員会) 昭和48年

3. 大平城の縄張り

見附市街の東に近接する丘陵尾根に構築された大平城(仮称)は、西側を $35^{\circ}\sim40^{\circ}$ の急傾斜をなす崖面となり、東は $25^{\circ}\sim30^{\circ}$ の傾斜面をなしている。この尾根の一段高い部分に本丸を構築している。本丸の平面形は北側で狭い台形を呈し、南北24m、東西は北側で12m、南で約20mの削平された平坦地である。標高102mで壇状を呈している。本丸の北縁部に高さ50cmの土塁状積み込みがあり、その基底部は南北約6m、東西の現長5mである(西側はブルトーザーによって破壊されている)。

本丸から北側の尾根にかけて第1号空堀がある。この空堀は本丸の北及び東側を鉢巻状に半周するもので、約 60° の角度をなす鋭い薬研状の掘込みで、堀底部には幅10cmの平坦面をもつ。堀幅は北尾根の部分で約3.5m~4m、東側では平均1.5m前後である。北尾根での堀の深さは攻撃面からすれば約2mであるが、防御側からすれば約3m(本丸と堀底部の比高)の深さを有する。第1号空堀の北に土塁を配し、空堀の防御機能をより強化している。この第2号土塁は土砂の積み込み基底部が東西13m、南北7.4mの幅を有するもので、第2号空堀を効果的に補強している。

第2号空堀は幅約2.5m、長さ約23mで、北側尾根を東西に切断している。この空堀の北16mの位置に第3号空堀があるが、第23図に示した如く、前者2本の空堀とは形態を異にするもので、升形状を呈するコの字形空堀である。北側の東西辺は約14m、西側の南北辺は12m、東



第23図 大平城の遺構配置図

側は明瞭ではないが南北9mと推定され、北東隅に2m前後あきができる。このように本丸北側の構えは空堀を主体とした防備ラインで構成されている。

本丸の南側は東西20m、南北約10mの塹状を呈する部分に土砂を積み込んで土壘とし、自然の沢を堀として利用しているが、南への構えは単純である。

本丸の東斜面下、比高10m前後の位置に3段の削平した曲輪を配置している。上段は12m×17m、中段は15m×15m、下段は15m×30mの広さを有する曲輪群で、西側を本丸、南北両面を小尾根で囲まれており、東は急斜面となっている。この曲輪は兵員の駐屯地であり、千人溜または武者溜とでも称すべき役割をもったものと推考される。

本城跡の縄張りをみると非常に単純な構えであり、細部にわたる造出が見られず、防備も南北尾根線に空堀と土壘を配する程度であり、曲輪の配置も単純である。即ち、長期戦に対する構えと言うよりは応急的な構築で、必要最少限の造作をしたとしか考えられない。

出土遺物で城跡と直接結びつく資料としては陶質土器の摺鉢片と甕または壺の破片である。しかも、量的にも数片であり、時代を決定する資料としては弱いが、摺鉢の摺目及び胎土の状態から室町後半～戦国時代と幅をもたせておきたい。

(関 雅之)

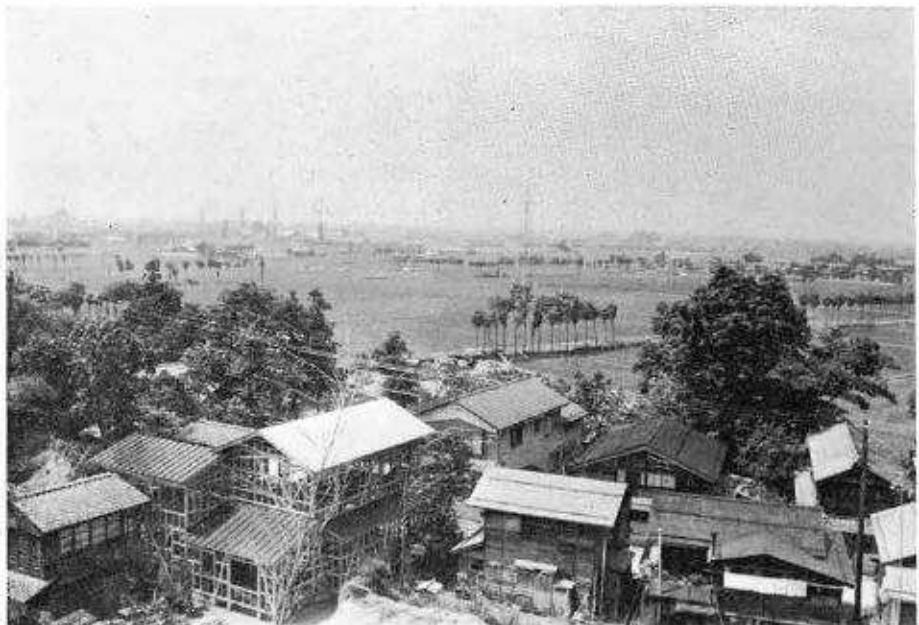
4. ま と め

大平城と見付本城とは直線で約1.1km、谷をへだてて相対した位置にあり、見付支城は大平城と同一尾根の北端高度差50m、距離にして300mと接近した位置にあるが、両者は急傾斜の崖面で境をなしている。見付本城と支城は特色ある畝形阻塞性の共通した施設を有しているが、大平城はその縄張り造作面で大きな相違をもっている。この差は時代差を示すと考えるよりも、設計者の相違として把握すべきではないかと考えられる。

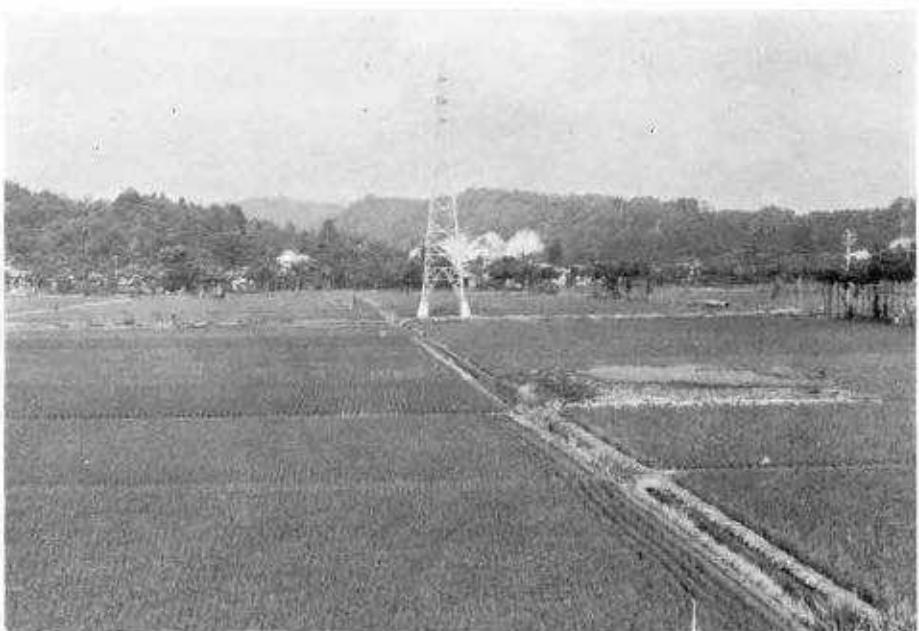
本質的な問題として、見付本城との関係を考える必要がある。即ち、見付本城に従属してこれを補助する「支城」とすべきか、逆に「対の城」と考えるべきかである。城の総構えの本質的な相違及び同一尾根の300m北にある見付支城の関係を考えると「支城」としては理に合わない面が多い。敵城を攻める際の拠所として構築した単純な構えの小形城で、所謂「付城」と考えたい。見付本城とは谷をへだてて相対し、特に北側に対する防備に重点を置いた縄張りからも想定される。

しかし、文献的に立証する資料はなく、今後に残された問題が多くあり、山城の調査方法についても検討する必要があろう。

(関 雅之)



遺跡遠景（北側より）



遺跡近景（西側より）



発掘グリッド



C 24 グリッド断面



D 66 グリッド断面



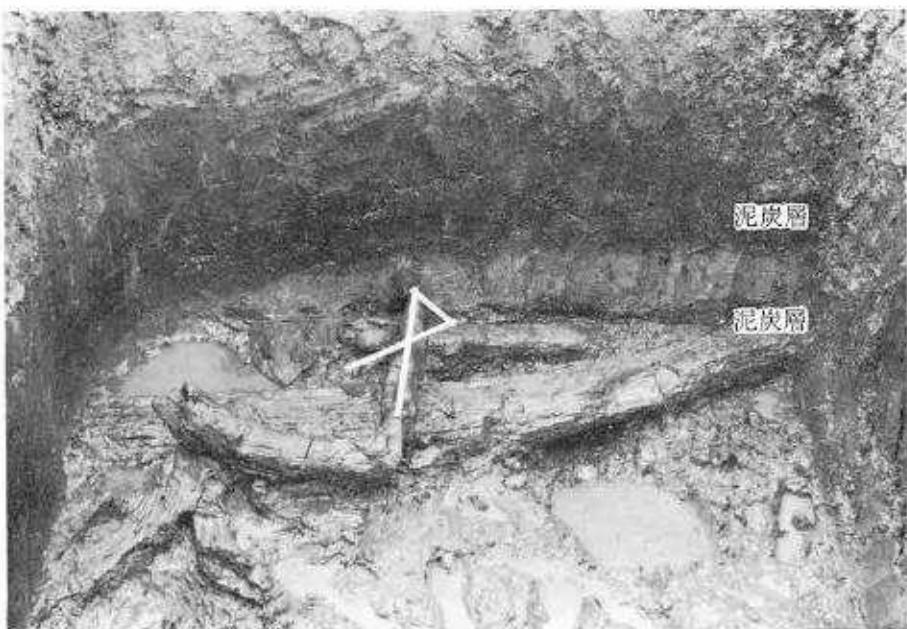
遺物の出土状態（蓋）



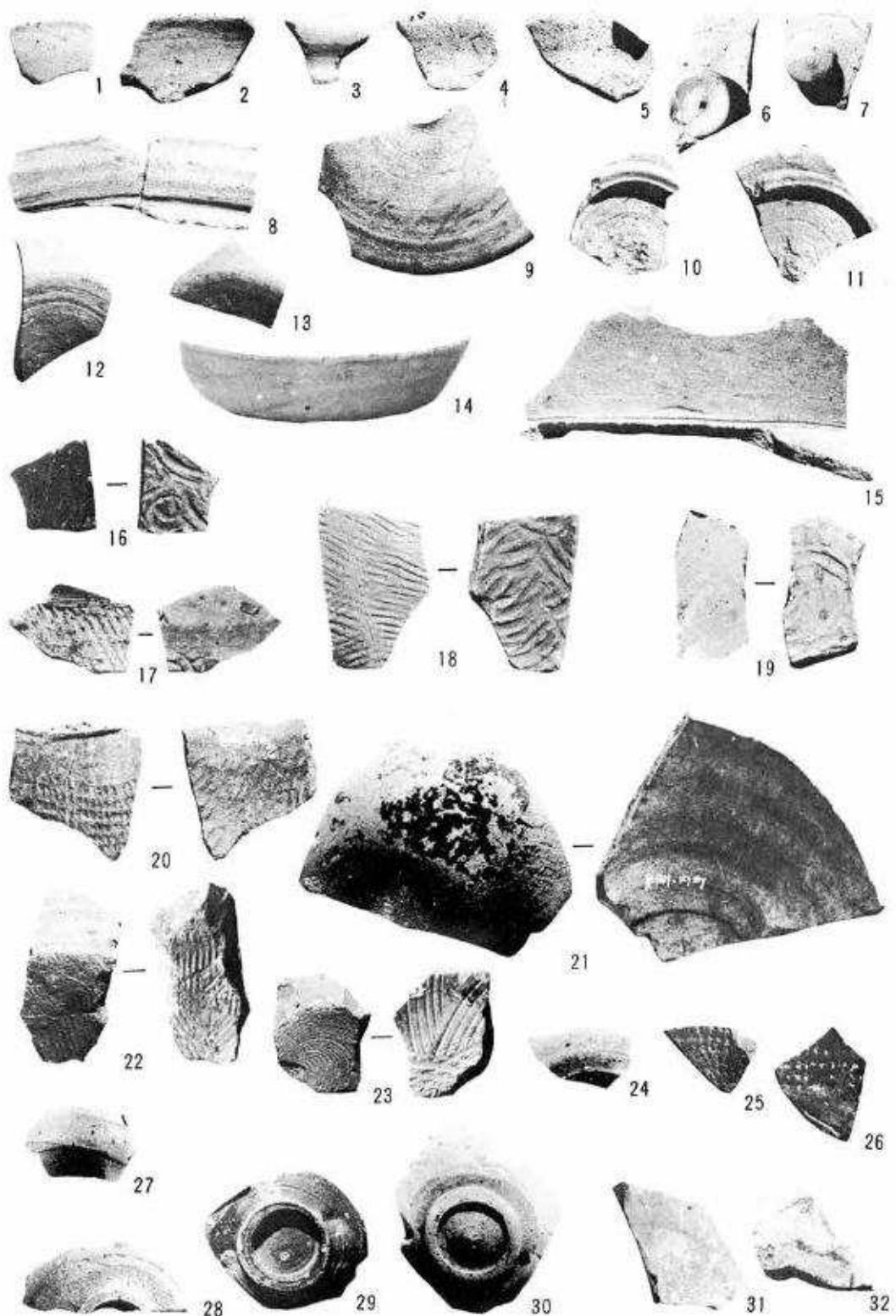
遺物の出土状態（杯底部）



遺物の出土状態（土師器壺形土器）



D 66 グリッド 樹木出土状態



上縁器、須恵器、中世陶器、近世・現代陶器、砥石



見付本城跡



大平城跡（矢印 発掘地点）



北尾根より本丸をのぞむ



本丸より北尾根をのぞむ



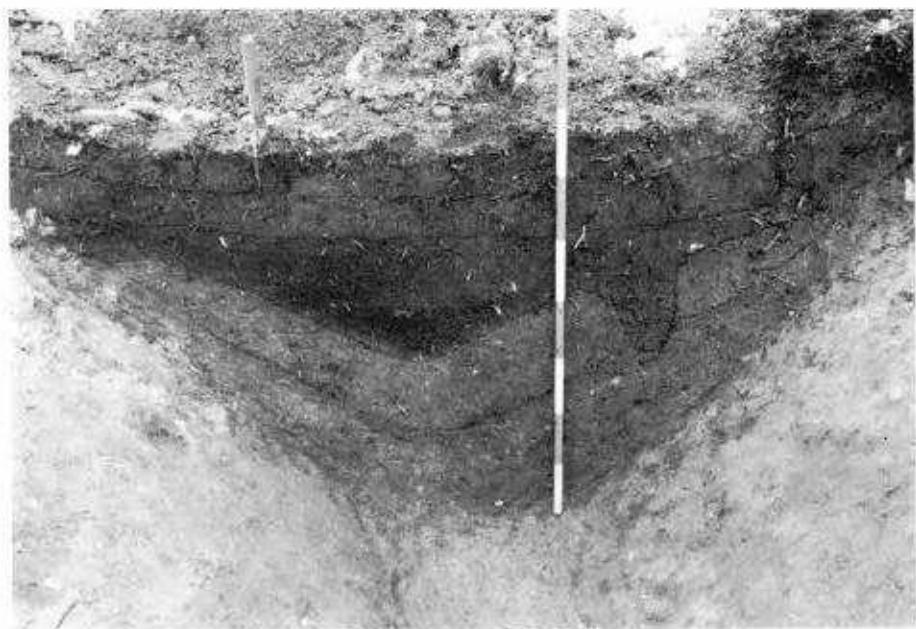
第2号土塁の発掘スナップ



本丸東側の平坦部



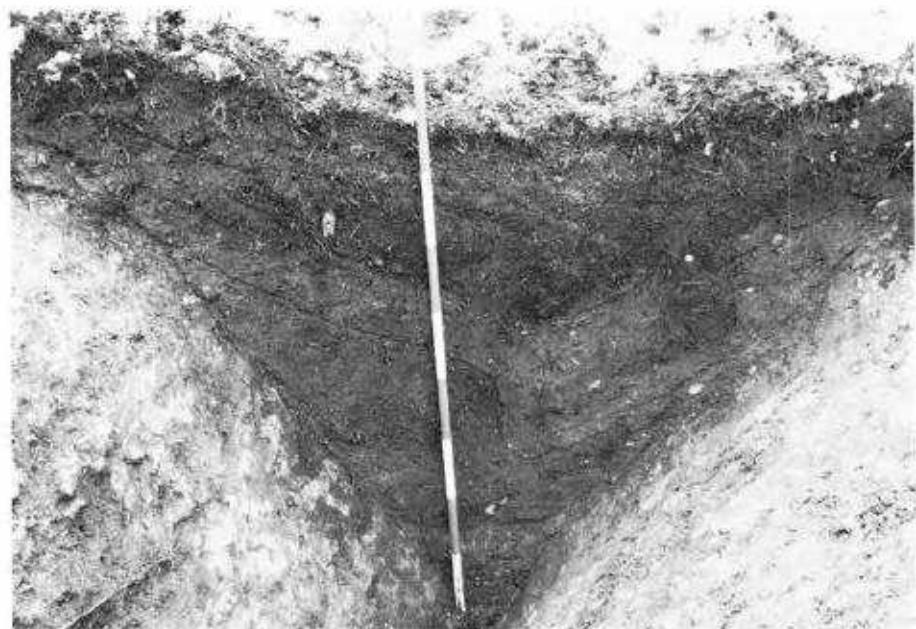
第1号土塁のセクション



第1号空堀断面



第1号空洞 1T コーナー



第1号空洞 1T 断面



第1号空堀 2T 堀底部



第1号空堀 2T 断面



第1号空堀 3T 堀底部



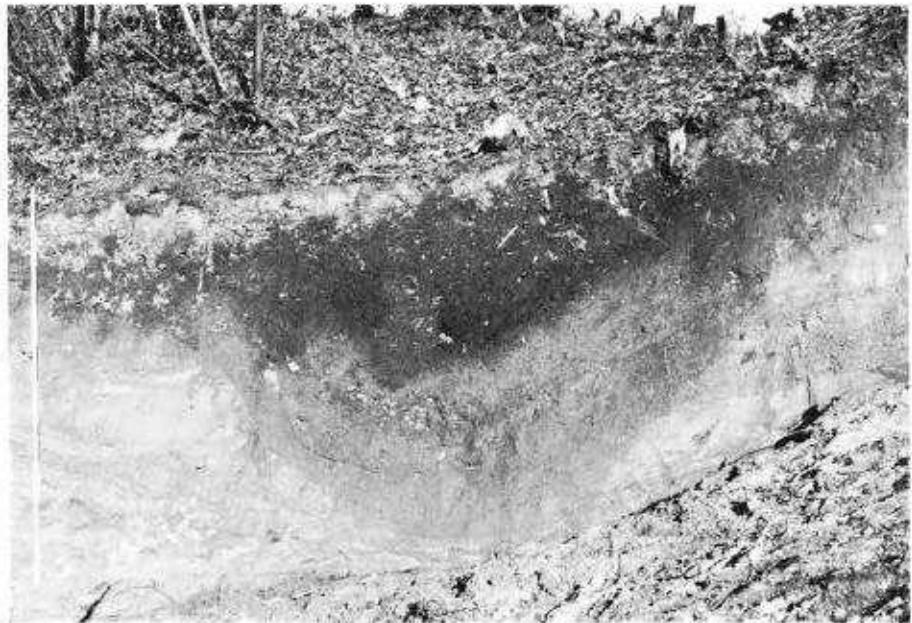
第1号空堀 3T 断面



第1号空堀 4T断面



第2号土壙の断面



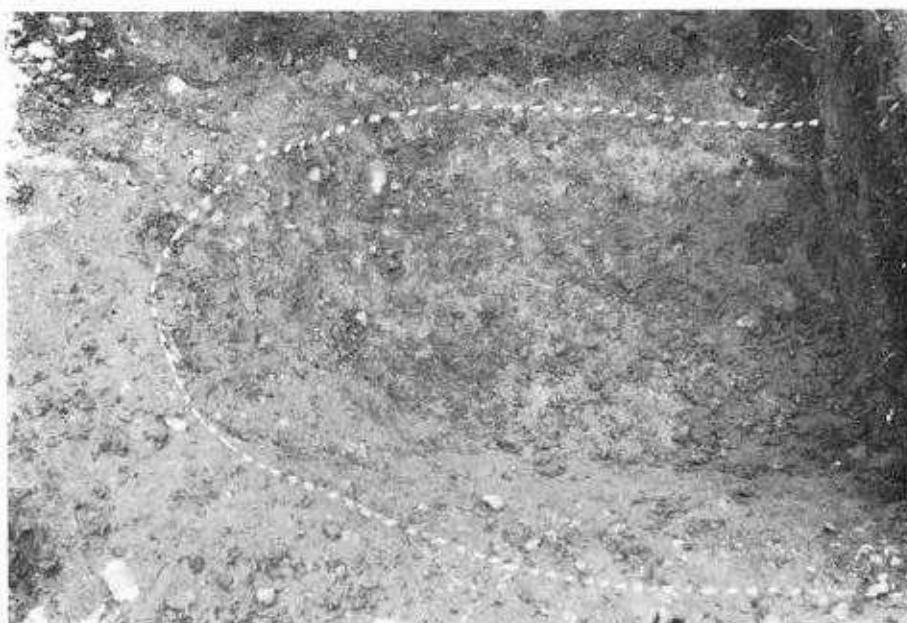
第2号空堀道路面の断面



第2号空堀の断面



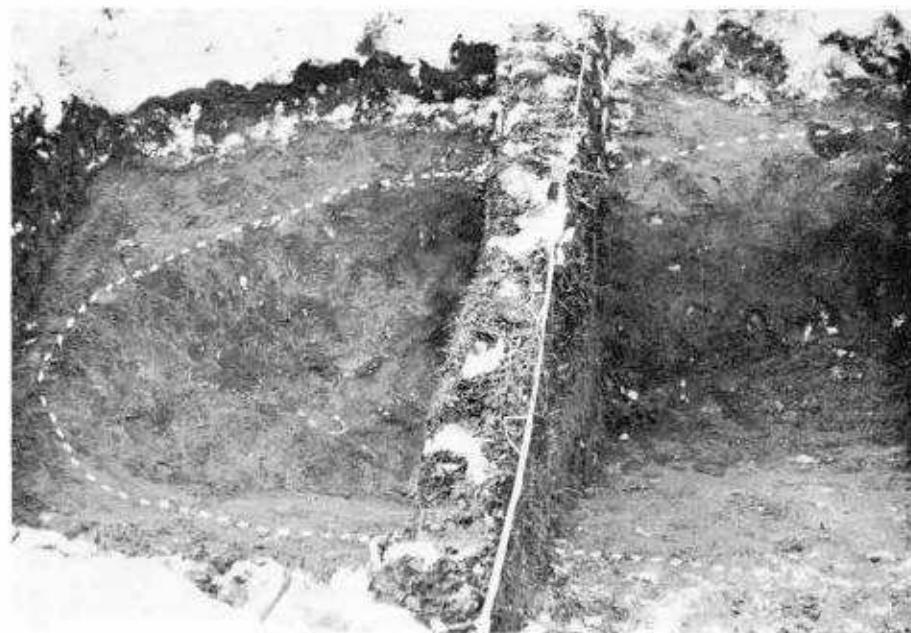
第3号空堀の断面



第3号空堀東側のあがり



第3号空堀西側断面



第3号空堀西側のあがり



牛ヶ沢双ツ塚・1号塚



牛ヶ沢双ツ塚の発掘



牛ヶ沢双ツ塚・1号塚



第1号塚の断面



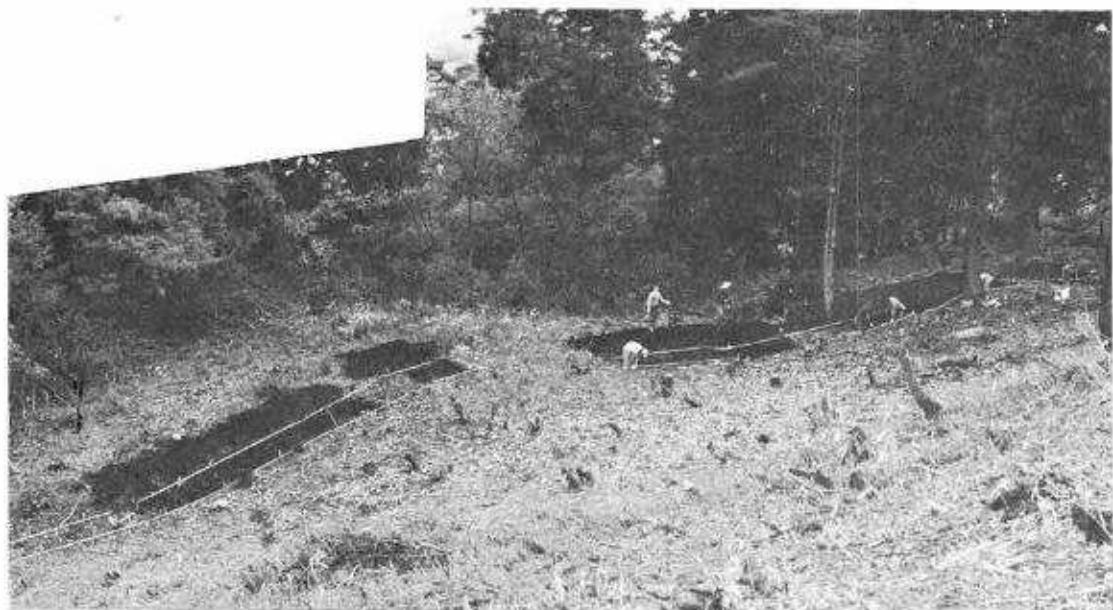
牛ヶ沢双ツ塚の発掘



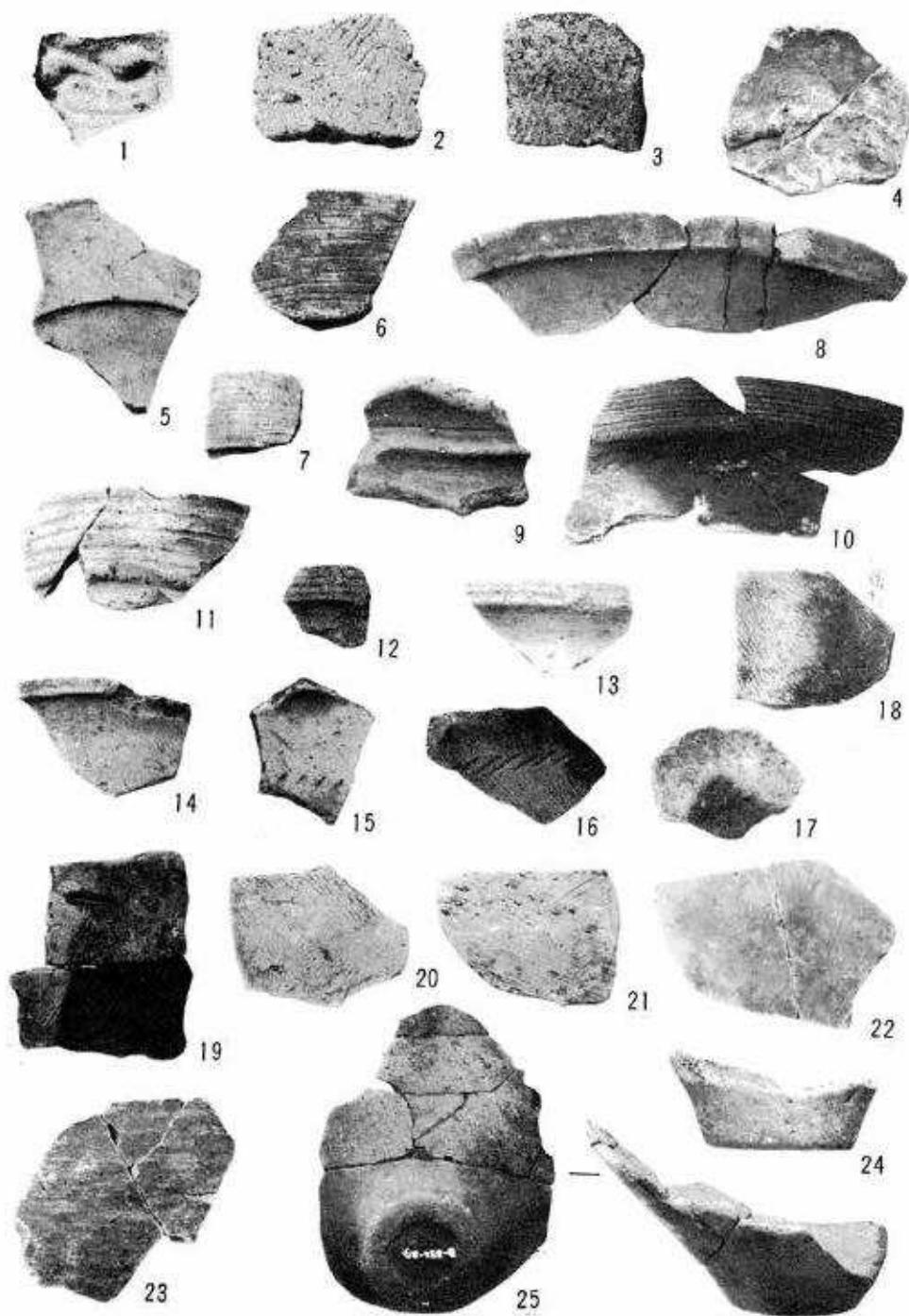
D1号トロッヂの発掘



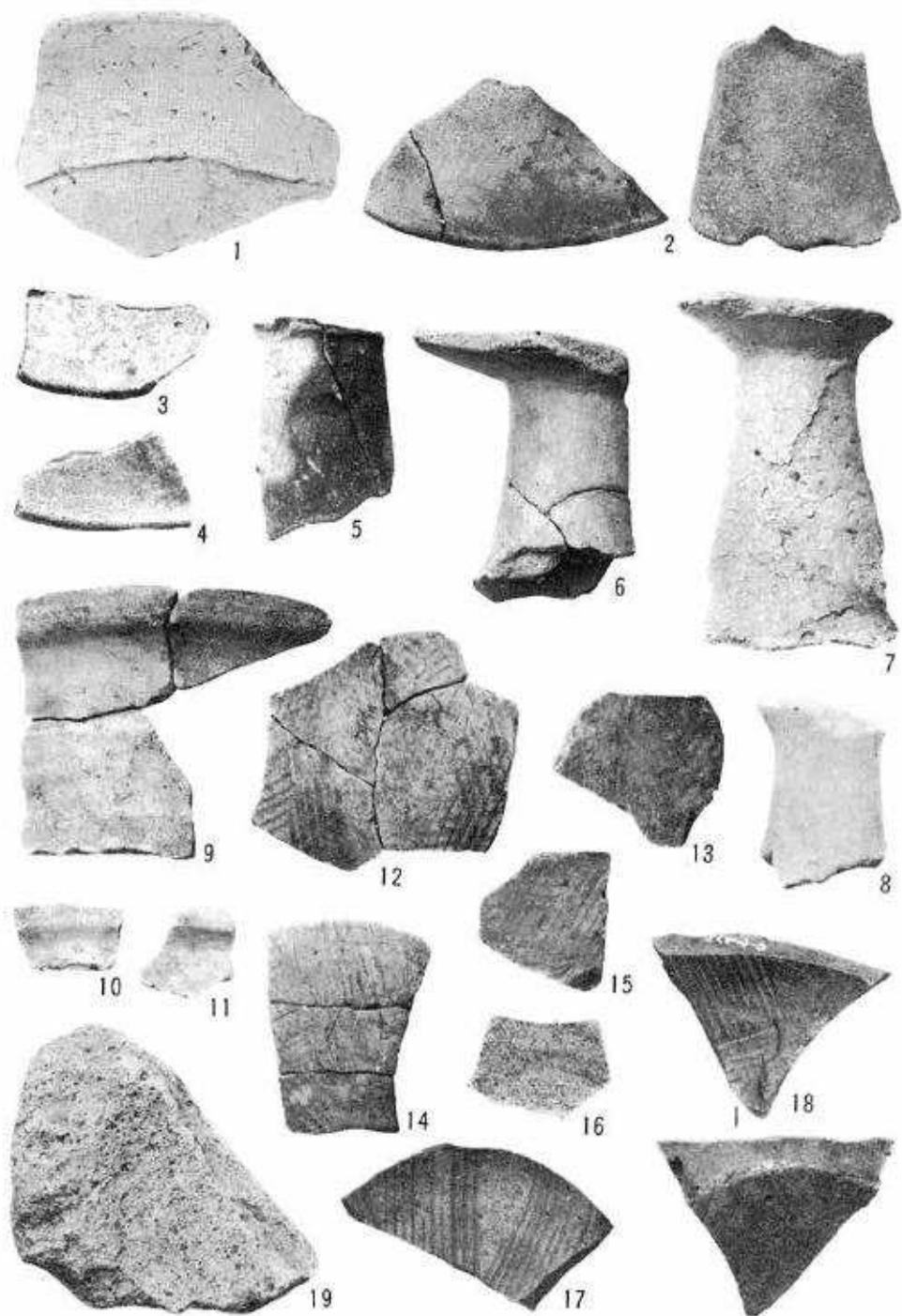
D 1号トレンチ出土の土師器



D 1号とD 2号トレンチ



出土遗物 (绳文式土器・古式土筛器)



出土遺物（古式土師器・須恵器・陶質土器・石皿）

埋蔵文化財緊急調査報告書第3

埋蔵文化財発掘調査報告書

北陸高速自動車道

— 1 9 7 4 —

昭和49年3月25日 印刷

昭和49年3月31日 発行

発行 新潟県教育委員会

印刷 ◎長谷川印刷

新潟市学校町通1番町6

T E L 083309番

埋蔵文化財緊急調査報告書3 正誤表

ページ	行	誤	正
1	12	4月13日	4月12日
3	下から9	黒坂(後期)	黒坂(晩期)
3	下から8	前山(中期)	前山(前期)
3	下から8	羽黒(前・中・後期、弥生後期)	羽黒(中・後期)
4	下から1	H.長者ヶ原	H.長者ガ原
6	5	送電線鉄塔の間	送電線鉄塔の先
11	9	破片とかも	破片であろうかと
14	12	半の木	半ノ木
15	下から4	須恵器発掘調査報告	須恵器窯跡発掘調査報告
19	下から1	莉啓部子	莉部啓子
21	下から5	直刀片	刀子
21	下から4	出土品は	出土品の一部は
32	下から3	まして、	まして、
39	下から9	内側21.m	内側1.2m